明治二十九年七月五日發行

女鑑

第百拾貳號

東京國光社



女鑑第百拾貳號

目録

阪東の僧の女



避暑の方法

孃たちも、われも人も、此のやまと島根の民草は、皆、尊き　天皇のみ爲めに、うるはしき皇國の御ために、これもかも、世に盡すべき重き任務を擔ひも抱きも有ちもしたる者なる故に、いとゞ大切なる身體なるに、しかも、人の身は、われも人も、金石のやう堅からずして、弱くもろく、さながら木ずゑの花か木の葉の如きものなれば、常に心をとめて、身を養ひ、身を守り、身を大切に保たざるべからず。されば、寒き風雨、暑き炎熱を避くるといふ事も、もとより惡しき事にはあらず。なか〳〵に、いと道理のあるわざなめり。

げに、避暑を爲す道理は、いと正しきなり。朝夕のいとなみむづかしうして、それに叶はぬきはは、さてもあれ、かなはむほどは、つとめて心がくるこそよけれ。されど、避暑の方法には、さま〴〵なるあらむ。さま〴〵なるが中には、自らよ

きもあしきもあり。皆、よしとはえいはず。皆、正しとはいひ難し。されば、よく正しく清き方法を擇らざるべからず。また、避暑の方法は、あながちに山の奥をわけ、水の邊りをたづぬるに定りたるものにもあらぬなり。

いま、近き頃、世の中にむねと行はるゝものをかいあぐれば、まづ、海邊にうつりすみて、うしほをかづきて遊ぶ彼の海水浴といふものなり。そが次には、温泉わき出る邊りに假ねして、ゆあみしくらすもの、さては、水かづき湯あみするにはあらねど、木立すゞしき深山がくれ、流水清き谷川べりをたづねて、しばしの間ものしづかなる起臥するもの、あるは、白雲をよぢ流水をたより、山々河々たづねめぐりゆくもの、さては又、他郷の客窓にいそしめる者は、しばし故郷にかへり來て、馴れにし軒端に睦しき袖をかいつらぬるなど、げにさま〴〵ならむ。それが中にて、如何なるが、孃たちの避暑には、こよなきものならむ。それも、おしなべには定めいひ難し。よきもあしきも、その行ひざまにもあるべければなり。されど、そが中に、近き頃の流行にはあれど、彼の海水浴といふものは、如何な

らむ。おのれは、嬢たちに最ふさはしからず危く、嬢たちに好ましからずればゆるなり。姿容貌をつゝしむべき女子が、見ぐるしげなる笠に白衣、みだりがはしき姿して、魚にもあらず海士にもあらず、あやしげに水かづき狂へるさま、底の玉藻にうつらむ影も、はづかしからずや。やさしき女子たらむには、ふさはしからぬわざならずや。殊に、男も女もうちまじりて、へだてなく、馴れ〳〵しげにうち見たるなどは、たゞに嬢たちに似つかぬのみかは、何となう、浪ならず岩ならぬ危さをもおぼえて、好ましからざるなり。

温泉も、知る知らぬこれかれ、堅くもあらぬ襖一重を、わづかに隔てゝ起臥し、殊に何のけじめもあらぬ浴室に袖つらぬるなど、深き淵のべに立つが如く、氷の上をわたるばかりの危き心地す。されど、それも、父母など正しき介添あらんには、とかうはあらざらむ。

また、畫かき文かく女子の上に、まゝきくことなれど、彼の山光水色をあこがれゆくといふことも、よのつねの嬢たちには好ましからぬなり。されど、故郷の軒を

慕ひゆきて、なつかしき父母の膝下に侍き、馴れにし山河に親しき睦き同胞などと、久しき袂つらねて、むかしの松風水色に、暑さ忘れむなどは、いとうれしくこよなき避暑ならむ。都に他郷に、ふるさとを離れ來て、もの學びしてあらむ孃たちなどは、かゝらむ避暑ころ、ぜひにあらまほし。

海水浴にもあらず、溫泉にもあらず、たゞ凉しげなる山がくれ、淸げなる水の邊り、ものしづかなる邊りを慕ひ來て、父母同胞など、諸共にむつまじく、長閑にしばし明かし暮らしたらむは、かゝる方にこそ避暑はあらまほしきなれ。されど、それにても心をいさぎよく正しくもたでは、必ずよしとはいふ能はず。すべて人は心のもちかたなり。されば、心さへ淸く凉しくいさぎよくもたば、山なくとも水なくとも溫泉に入らずとも、海水にくゞらずとも、自ら凉しく暑さも忘るゝ方もあるものなり。孃たち、心したまへ。

論説

島の曙

肝付兼行

茲に誠によい實例がござゐますから、御話をします。去る明治十八年、我が軍艦筑波號が、卒業の生徒を乘せて、遠洋航海に出掛け、ニユジーランドに往きて、其のヲークランドに碇泊した時、何しても、世界第一の海軍國英吉利の殖民地のことゝて、ソコの市會議長に、ブラハムと云ふ人が有つて、(丁度今日我が國でいふと、楠本さんのやうな人) 大層に、我が軍艦の往いたことを喜び、其の奥さん、令孃、其の他市會議員等の夫人、令孃が寄つて毎日のやうに、厚く、我が筑波の乘組員を待遇しました。そうして、ブラハム氏は、少し此處より距れたる海岸の温泉場に、別莊を持ちて居たから、是非、其處へ軍艦を廻されよと、只ならぬ懇望でありました、よつて、其の厚意に辭しかたく、遂に廻航することに約束したのであります。然るに、また、急に日本より電報が達しまして、直ちに解纜をしなければならぬ事になつたので、使者を遣つて、其の約束の果しがたきを告げ、且つ、日々厚遇を請けた謝辭を述べしめんとしたが、折から非常に烈しい風浪でありたので、其の使艇には、艦中より屈指の水兵を乘

せて、陸に差向けたのであります。然るに此の使艇が出ると、是れと行き違ひに、一艘の舟が帆を掛けて、非常の風浪を物ともせず、此方を指して走つて來る。仍て此の海上、なんの舟であるかと思ふて、艦中より其の有樣を視て居ると、何ぞ計らん、間もなく我が舷側に着いた、舟中を見れど、先づ、婦人許のやうであつた。さうして、それより、其の艦中に上つて來る顔を一々に見ると、孰れも、過ぐる數日、饗應の席で艦員を懇切に待遇された處の妙齡清楚の令孃達八人のみで、全く一人の男子を交へない。此に於て、當時、我が艦員は、艦長有地大佐(現今中將)始め、英吉利が、今日世界の海上に富强を恣にして居るの偶然にあらざることを深く感嘆したさうであります。是は、私の全く有地中將より直接に聽いた話しでありますが、私の望むところも、全く此處に外ならないので御座ります。又、私は、妄に歐羅巴の物眞似をするのは大嫌ひで、飽くまで國粹を保つてゆきたいので御座ります。併し、善事には、眞似を決して厭ひませぬ。是より後、眞の海國男子を養成するには、家庭の教育者たる母親が、先づ、躬自ら小說を見るなり、或は、海傑の傳等を讀み、又、實地に軍艦を看るなりして、其の海事思想を養ひ、以て其の子を教導しなければならぬと思ひます。私共も幼き時分、母親の膝にもたれて見聞したことは、今に能く記憶して居て、決てし

忘れませぬ、即ち、男兒が志を立てるには、多く、此の母親の話が基礎になるのでありますから、眞に海事思想に富むだ豪傑を造り出すには、其の母親さんに、此の思想が無くては不可ませぬ。何卒呉々も此の心懸けをお忘れのないやうに切に願つて置きます。

終に臨んで、モウ一つ御耳に入れて置きたいのは、新田左中將と勾當内侍との關係で、否、是れに其の情の似て趣の異なる、ネルソン大將とハミルトン夫人エンマとの關係であります。世人は、彼の勾當内侍については、若し内侍にして無かつたなら、千歲に憾を遺すやうなことはなかつたで有らうにと云ふて、あの時の事を多く遺憾に思つて居りますが、今、私は、内侍については、茲に、善いとか、悪いとか云ふことは申しませぬ。唯ネルソンの傳を讀んで、ハミルトン夫人の、彼に對する擧動を了し、大に感服しました餘り、嗚呼我が勾當内侍にして、若しハミルトン夫人だけの膽識がありしならむには、千古の遺憾に引替て、千古の美談を遺したであらうに、惜しきこと哉、との、一言を遺すのみであります。要するに、我が國の如き武人國には、ドウか、又、ハミルトン夫人の如き、女丈夫の多く出でむことを望みます。ソコで、ハミルトン夫人と、ネルソン大將とは、ドウ云ふ關係の中であつたかと云ふに、一躰、ハミルトン

夫人は、英國の外交官ウイリアム、ハミルトンの妻で、名をエマンと云ふ人であります。彼の一世奈勃翁の歐羅巴を苦しめ始めた頃、ウイリアム、ハミルトンは、ネーブル國(今の伊太利の一部)に駐在の、英國公使でありましたが、ハミルトン夫人は、容貌の美は左までゝなかつたが、稀なる才女で、諸技藝にも通達し、殊に交際に長じて、膽識がありましたから、外交官の夫人には適ふた人でありました。實に、ネルソン一世の鴻業には、ハミルトン夫人與りて力あるのであります。夫ウイリアム、ハミルトンが、ネーブルに公使たるより、エンマは婦人でこそあれ、ネーブル當時の朝廷を、悉く手に入れて、其の言は一つとして其の朝廷に行はれざるはないと云ふ位に信用を得ました。是から後、我が日本でも、國の進むに從ふて、益外交家が必要になつて來る、此の御席にも、將來外交家の夫人とならるゝ御方も澤山に有りませうと思ひますが、願はくば、ハミルトン夫人の如き、外交上の才に長せらるゝやうに致したい。又、此の御席の御婦人方は、萬國史を御讀みでせうから、御承知でありませうが、ネルソンは泰西の海將として、誰れでも指を第一に屈する勇將であります。此の人は、一生の間に、百五度戰をして、千八百五年十月二十一日、トラハルガルの海戰に戰死した人であります。ネルソンが、百五度の戰の中、四大戰と云ふは、第一セントヴィンセントの海戰、

第二ナイルの海戰、第三コペンヘーゲンの海戰、第四トラハルガルの海戰であります。而して其の中、ネルソンの最も世に名を揚げたのは、ナイルの戰ひ、最も苦難をしたのは、コペンヘーゲンの戰で、最も世界の爲に利益を與へたのは、トラハルガルの海戰であります。世の人、多くは、ウエリントンあることを知りて、ネルソンあることゝを知らず、又ウォートルローの大戰を知りて、トラハルガルの海戰を知るものが少ない、私は、常に此の事を、ネルソンの爲に、甚遺憾に思ふて居ります。乃ち、私も、常に歴史を讀みて、奈勃翁がウォートルローの敗北は、モスコーの敗北に基き、而して、又、モスコーの敗北は、トラハルガルの敗北に基くと、了解して居るので御座ります。今、其の故をざつと御話してみますと、奈勃翁も歐洲を蹂躪して、殆ど大陸は意の如くなりましたが、まだ、英吉利に志を得ることが出來ない、即ち『英吉利海峽をして、若し六時間我が有たらしめば、我は則ち世界に王たらむ』とは、實に奈勃翁當時の志望でありました、ソコデ先づ、西班牙を味方に引き入れ、共に英吉利を進擊ずるつもりで、大に其の準備をしたところが、未だ此方より攻擊にかゝらない中に、却つて英吉利の方からカッツ港に押寄せられ、竟にトラハルガルの大海戰となりて、大敗をしました、是に於て、遉がの奈勃翁も、竟に英吉利に兵を用ゆるの念を斷ち、更に大陸との交通

を断たしめて、之を糧食責にせんと、大陸條例なるものを制定して發布したが、露西亞がドウしても、之を奉じない。ソコで、根を絶ちて幹を枯らすの策で、露西亞征伐と出かけたところが、モスコーで、彼の著明なる大敗を取つた。そして此の大敗の結果、多數の股肱を失ひ、形勢一變して、終にウォートルローに、最後の大敗を取るの運命に陷りたのでありますが、抑此の大敗の根本たるトラハルガルの大海戰に、ネルソンをして奮起、世に大功を奏さしめたのは、實にハミルトン夫人エンマの力にあると謂ふことが出來るのであります。又、是のみならず、ハミルトン夫人は、ナイルの戰勝にも、與りて功があるのであります。

偖、ハミルトン夫人は、即ち、ウイリアム、ハミルトン公使の妻でありますから、固よりネルソンと夫婦でもなく、又、決して其の情婦と云ふ譯でもありません。惟ふに、男女七才にして席を同じふせず。といふ敎訓が、先入主となりて居る東洋の習慣上より見られましたなら、定めて、一時はヘンに御了解もありませうが、所謂肝膽相投ずといふ、極の親友で御座ります。唯、ドウいふ譯であつたか、晩年に至り、ネルソンが其の妻を離別したが爲に、後世彼是と、其の交際に就き物議がありますが、私は飽まで、其の間に曲りた交際はなかつたらうと信じます。即ち、第一に其の交情の如何、

第二にネルソンがハミルトン夫人を尊敬したるの如何、第三にハミルトン夫人の果して女丈夫であるか否やは、私が今を距る十年前、内田成道と云ふ英學者と、漢學者として有名なる岡千仭氏に勸めて飜譯をさせましたネルソンの傳に明でありますから、漢文で御婦人方には不向きでありますが、玆に其の節々を讀みて御聽かせ申します。

遜先至那魄耳英公使維良語其妻奄馬曰。吾欲使汝見偉人容貌雖矮異日必揚名天下。我家平日不請客。唯遜不可不請。夫妻設饌招請。遜東其妻稱奄馬女德那魄耳固王仇法國。悅遜至稱曰護以太利太爺。

遜奮戰奏阿布啓之大捷。那魄耳闔國歡呼數日。不絕聲。那魄耳王夫人。墺后馬利亞别理撒女。法后馬利安脫瓦理妹。捷報始達。夫人喜極而泣。接王及諸子口舞踏室內。如喪心人。抱左右侍女三呼曰。勇敢哉遜乎。贈書在英公使。曰余聞是捷。殆不信伊太利有今日。皆由勇敢哉遜乎之力報此捷。恨無翼可飛賀此捷。恨不令汝見我夫妻狂喜之狀。九月廿二日遜乘番加德艦。至那魄耳港。王粧數百船舶。張樂設饗。維良夫妻粧美船。出迎。奄馬雖女流。達各科技藝。才情之慧。勝容貌之麗。尤爲夫人所寵言無不聽。英艦隊在西剌丘斯港。奄馬爲遜畫策。給糧食。遜亦曰。微奄馬不能奏阿布啓之大功。遜跡法艦。奄馬日夜憂慮。殆倍遜憂危。捷報始至狂喜如中丸而僵者。是日出迎。奄馬躍上甲

板。抱遜啼泣。那魄耳王亦升迎九里。把遜手。三呼曰存國恩爺。諸艦亦皆同聲呼存國恩爺。

十二月廿二日午後八時遜抵三艇。迎王及夫人王族於番加德艦。幷載英國客商。候曉發洋會大風雨。艦身掀飜王子猶孩。病悸奄馬懷抱施治。遂絕奄馬在急難中承事王及夫人。無所不至。侍臣族擁無復一人若焉者。

初遜買田產麥爾屯。麥爾屯維良夫妻鄉里。奄馬徐營屋宅設饗招遜。遜大悅。約維良夫妻曰我三人最上壽者。遂有此宅。遜以悅奄馬來物議。父以德門亦愛之。奄馬天稟敏慧。各科技藝無所不達。遜與之友愛。出於互相欣慕之誠。不知者或爲出于男女相悅之私情。父以德門漸知此事大悅。蓋歐俗重婦女。婦女有才行藝能者。皆與男子講友誼互相往來。爲成德輔仁之資。非東洋婦女終日閨門之中之比也。奄馬爲女丈夫。觀救那魄耳危難一事可知也。而遜與之周旋亂離之中兵戈之間。謀畫相資。如在西刺丘斯仰糧食類。固有非外間所能知者。此後維良年老病沒。執遜手托奄馬曰我妻盡力那魄耳。請告此事政府給恩祿。遜諾之。維良信遜。無所疑至臨死託奄馬。此亦可知兩人交誼也。後陳奄馬在那魄耳盡力家國於時宰遏丁頓。遏丁頓不省。遜歲贈奄馬千二百磅。如維良生時俸額。以終其生云。

遜已不違其志。漸倦戎務。浩然有歸志。乃告志請暇歸麥爾屯舊里。日與姻戚故人。談舊成歡如無復意戎事者。一日晨起。大佐不拉克伍得來訪。遜聞其聲。意謂此必有故也。出見。果曰法艦敗於斐尼斯退爾入維果港、整理毀艦。合費洛耳艦隊。泊開的士。遜攘臂曰。善余且擒徵耳紐父以果昔年之志。不拉克伍得已去。遜深難去舊里未決。曰吾已立大功。天下之事應付新進繼起者。散步庭中。有所思念會奄馬至。見遜容貌不似常問故。遜不敢言直曰。余來此日與姻戚故舊相從。人間豈有此娛樂哉。奄馬固疑。察識遜意。進說曰。余知子志在四方。子在洋上三歲。驅逐法艦。喫苦辛非他人所勝。豎井九仭。豈可付全功人手乎。子宜為國人出奏一大偉勳而彼歸鄉里享今日樂。如此子事始了。子志始成。此為丈夫立身之本領人間無上之娛樂。子臨此際。何猶豫之有。遜遽然睨奄馬吁勇哉奄馬哈迷屯。吁賢哉我奄馬。若使如子者多于世。如遜其人者亦可繼而出矣。

二十一日黎明遜上甲板。方西風。怒濤層起。可令伍得乘勞耶耳速委連艦。督下風艦隊十三隻。遜乘維克拖利艦。督上風艦隊十四隻。遜觀戰備已整。退入艦室。草文禱上帝曰。敢禱上帝為我英國及全歐億兆人民賜我赫々勝利。敢禱此役終戰使我無過舉。幸奏大勳。敢禱我兵奏捷後。遇敵以慈愛。燿我大英榮譽於天下。敢禱。上帝鑒我忠

誠幸降大福。若夫遜一死一生。命在上帝。祭畢出日記。書曰維良寡婦奄馬有功於我英遜所明知。而未賜褒賞。此揭其略。一千七百九十六年。西班牙王督告其弟那魄耳王。絶英。奄馬献此書政府。命地中海司令遮味斯曰。見西國倉庫艦隊乘機襲擊。遮味斯不可遂失機會。奄馬勸那魄耳王命西剌丘斯府官給糧食。遜奏阿布啓之功。實由奄馬在那國陰助之。奄馬功我大英如此。使遜一朝戰死。則誰分食俸以報其功者。請我王錄奄馬做功。使之得食俸以終百年。

乃ち、之を御聽取りになつたなら。千七百九十三年一月、ネルソンが始めてハミルトン夫人と相見てより、千八百五年十月廿一日トラハルガルに戰死する當日まで、十三年間に彌る兩人の間柄は、大要御分りになりたらうと思ひます、要するに、積極の言葉を以て申しますと、ハミルトン夫人は、世界空前の名海將たるネルソンを、掌中に弄したので御座ります。女の頭の髪には、大象も繋がれると申しますが、實に女丈夫が、親愛の男子に至誠を以て說く所には、釋迦も耶蘇も遠く及ばぬ特種の妙所があるので御座ります。而して此の妙所こそ、實に幾多有情の忠臣孝子をして、大忠大孝の義名を千歳に遺さしむる譽れの發言となるので御座ります。故に私は、我が海國の爲に、斯る女丈夫の、當會貴婦人方の中より澤山出でられんことを偏に希望いたします。

將來、我が海國富强の舞踏者たる、大和男兒に對して、其の奏曲者たり、又、其の對手たるべき、敷島女子を教育するの要點は、先づ、此處らであらうかと思ひます。偖、是で我が國の文明世界に夜が明けたばかりの島國であること、即ち、私が島の曙なる演題を以て、雜駁なる御話を致しました所以は、ドウかコウか御分りになつたらうと思ひますし、又、意外に時間を費しまして、定めて御たいくつであらうと存じますから、一部々々の、間口に狹ふして奥行に深い話は、また他日のことゝ致しまして、今日は是で御免を蒙ります。

（をはり）

女子教育一班（二十）

三輪田眞佐子

語に曰ふ、麻の中に生ふる蓬はおのづから直しとぞ。げにさるものなれど、かく、女子を教育するに、その所を求め、將た、その師を撰びて教育せんには、亦、おのづから、淑女も出で賢婦も顯はれ、あるは、女傑も起らむ。しかるに、世人、切に、愛嬢の貞操正しかれ、令德薫しかれよと望みつゝ、そがため。學校を求むるに、先づ課目のみを尋ね、教師を求むるに、文字のみを以てするこゝろ愚なるわざなれ。そも〳〵孟子の居は、氣を移すといふも、亦、かゝる教ともならん。

且つ、有德の女子を作らんとて、優美のわざに長けよかしと、點茶、あるは、活花を敎へしめ。温良の心術を養はゞやとて、絲竹の道を學ばしむるものは、ひたすら、表面ばかりは婀娜なる擧止をなすやう進み得んも。これのみにては、未だ、正義を踏みて恐れず、もし良人のためならんには、火水の難をも避けじと誓ひ、あるは、腸をもたゝんばかり心の亂れんときにだに、自若と直道を守る女子となり能はざれば。かゝる方法のみをもて、眞の女德を大成すること覺束なし。

思ふに、亦、温厚のみにて、未だ、一定の見識なきものに、女子敎育を托せんか。この擧動は靜肅となり、言語は柔和となり、あるは、事に臨みて忍耐せん女子となりて、所謂、消極的の道德ほどは行ひ得んも。進みて公義を果し、慈善を勤め、良人を補佐し、子孫を敎育するなど、所謂、積極的の道德はなすこと能はざるものならむ。故に、女子を敎育するものは、單に惡をなさゞるを敎ふるのみならず、なほ、善をなすべきを敎へ、總て、女子の心事を悉く修むるやう方針を定むべし。

亦、女德一切を具ふる女子を作るには。心理學、敎育學、道德學、あるは、諸家の說などを敎ふるのみにては、格別効力なきものぞかし。唯、心に深く感じ、固く銘するを以て、始めて德行ある人となるものなり。何となれば、徒ら暗記の學をなして、口

もて數萬言の卓說を吐かんも、感情を刺擊せざる以上は、決して實行することを能はざるべし。近來世人の論ふ(ヘルバルト)は、心理學を以て敎育者の助成學となせりとぞ。そは、倫理學は、敎育の目的を指示し、心理學は、その方法なるを以ての故ならむか。されど、德育をなすには、敎師自ら袖をしぼるばかりにあらざれど、決して感化の効力なきものなり。たとへど、むかし、和氣淸麿の姉なる、廣蟲は、世に、親なきがため、あるは、財なきがため、子を棄つるものあるを、いと哀におぼしけむ、捨兒を拾ひしこと八十三人に及びて、自ら慈母の如く敎養せしものを、今やうの女子は、內は、僅一人の繼子におぐみ、外は、一片の慈善だにいとふものありと、覺えず卓をうつ敎師の風采を見るものは、誰か同情を表せざらむ。あるは、和學の大家加茂眞淵は、妻の力を假りて學事を遂げ、青山延于は、母の諫によりて學者となりけり、と賞する敎師の聲を耳にせど、如何なる乙女も、いざわれもかくなさむやと奮起するに至るべし。

おのれ、幼時、紫式部の人となりを慕ひ居りしが。嘗て石山寺に詣でしに、一きは身にしみて感じけり。その時思ひけらく。彼の人、今に御坐しまさむ、おのれ從ひて女の道を問はましものをと、涙にしほたれぬ。折しも、月いとさやかにて、むかし、彼の君が、一七夜とか、こもりたまひしをりの月も、かくやありけんと、しばし沈思せ

む、おぼろげに、式部に逆ふ心地ぞしける。

いまもなほこゝろにうかぶ水ぐきの
あとをさやかにてらす月かな

亦、この頃。公明正大なる偉人、諸葛武侯の傳を讀みて、いたく感じぬ。

一封奏上出師時。文武高名天下知。讀到誠忠報邦句。案頭不覺涙漣洏。

これらは、勿論、詩歌としては、見るはその價なけれども、おのれの、つねづね、古人に感ずる情の一片だに現すよしなきをもて、かゝる折の心事を披露して、讀者に語らは、異日の參考ともならんか、あなかしこ。

女子のたのしみ

鹽井ふく子

仁者は山をたのしみ、智者は水を愛す、君子は理をきくをたのしみ、小人は利を得るをよろこぶ。堯舜禹湯は民の心を以てよろこび、桀紂は民財を殫し、高臺玉閣をかまへ、肉山脯林、酒を以て池となし、民をくるしめて、ひとり樂めり。孔子は疏食を甘んじ、水を飲み、肱をまげて枕とし、樂みその中にありとの給ひ、顏淵は一簞の食、一瓢の飲、なほその樂を改めざりき。かけまくもかしこかれども、白川の院は

我がひぢを枕となして思ふかな
　　げにたのしみはこれにすぎじと

と歌ひたまひき。また誾々、行々、侃々如たる弟子等の傍に侍するをたのしむ聖人あれど、一の美人を得て、

　我はもややすみて得たりみな人の
　　ねがてにすとふやすみ子ねたり

とて、二つなくよろこびれし人もありけり。山崎闇齋は、會津侯にそのたのしみをとはれしとき。己れには三の樂あり。天地の間、生あるもの何ぞ限らん。しかるに、萬物の靈となる事を得る、一の樂なり。また、天地の間、一治一亂、定めなき世に、右文の世に生れ出で丶、書を讀み道を學び、古の聖賢と臂を一堂の上に把るを得る、一の樂なり。また、その最樂の大なるものは、幸に卑賤に生れ、侯家に生れざりしことなり。それ今の諸侯は深宮の中に生れ、多くの人にかしづかれ、不學、無術、聲色に徇ひ、遊戯にふけり、之が臣たるもの主意を迎へ、因て之を稱譽し、本然の性をして消滅さする事多ければなりと云ひけるとぞ。或は、

　世の中は何處かさしてわれならん

ゆきとまるをややどとさだめん

などとて、家をも定めず、妻をもとめず、ひとり山水にこり、常に白雲の外に宿り、木の根岩角にまきて、海ひろく山遠く眼界ひろきながめは、萬戸侯の富にも勝ると賞せる人もあれど、また、盜人に金錢財寶のこりなくとり去られて、かへりて、

ぬす人も跡とざし行く夜寒むかな

と云ふ句を得て、よろこびたる俳人もありとか。げにや、人の心の異なるは、その顔の如し。文を好むの人は、ひねもす、よもすがら、書を友とし、書と語りてこよなき樂となす。狄仁傑は、名教の内に此の上なき樂あり、などか、俗人と語るをこのまんやと云ひけるとか。歐陽子は、至れるかな天下のたのしみ終日几案にありと云へり。秦の始皇は、文をいとひて書を悉くやき捨て、書生を皆あなにし、刑法を酷にし、人民をして雷霆鬼神の如くに思はしめ以て得たりとなし。書は以て姓名を記すに足り、劍は一人の敵、學ぶにしかず、万人の敵を學びんとて、項羽は兵法を深く學びたりと云ふ。その外、臺池・鳥獸を好むあり、音樂を好むあり、竽を好むあり、瑟を好むあり、色を好むあり、勇を好むあり、大和歌をこよなうめづるもあれど、唐歌を二つなくよろこぶもあり、靜肅なるを好むあれど、熱鬧をよろこぶあり。已れ先きつ日、門に立ち

居りしに、二人づれの書生の一人は、詩に所謂「一鳥不レ鳴山更幽」の境界こそ樂しけれと云へば、今一人は、何とてさる淋しき處の面白からん、凡そ世の中は人ありてころたのしけれ、人なき處何とてうれしからんなどあらそへりき、げにそれも道理、されど塵たゝぬをめづる先きなる人の心もまた一理あり。かく人の心の異なるにつれて、ろの樂む所も亦異なれど、彼の桀紂の樂みし所、もしくは、小人のたのしむ所は、眞の樂にあらざるは、言を待たず。人は唯其の分を守らんことを樂となしたらんこそよけれ。富貴必ずしもたのしからず、貧賤必ずしも苦しからず、始皇が阿房も心をわかしむるに足らず、原憲が蝸廬も中々に膝を容るゝに安かるべし。富貴天にあり、死生命あり、貴き家に生れては、貴き人の分を守り、賤しき家に生れては賤しき身の分を守り、男は男の分を守り、女は女の分をつくしてころ、樂みは自から其の中にあらめ。善をなすこと最樂しといひけむ、國民として國民の分をつくし、人の妻として妻の分をつくす、これ、豈、善にあらずや、自ら慈善と稱して、善事をなし、美名を博せんが爲めには善行を衒ふが如きは、これ眞の善にあらず。學問、才藝、世に秀づるとも、その行修らずんば何かせむ。己れの非行を掩ひて、巧みに世に處し、以て虛名を得るとも、其の良心は必ず苦しかるべし。

(未完)

史談

阪東の僧の女

鹽井ふく子

甚しい哉、孝の大なる事。世には、あやしき仙人のわざ、奇しき佛の道などを、いみじうやんごとなく、高大無邊のものとて、いたく稱揚するものあれど、いかでか、人も、われも、此の世の中に、孝にまされる道あらん。げに孝ばかりうるはしき道はあらじ。

何時の頃にかありけむ。むかし、坂東のさるわたりに、木立もいとふるび、岩のむしろもいと淸く、阿加井の水、影しづかに結びにたる山寺ありけり。此の寺に、すみぞめの袖いと淸う尊げに住みなしたるやんごとなき上人ありけり。流石に、その頭には、門徒も數多ありて、朝な夕なにつぐる鐘の音と共に、み寺の名も、上人の德も、世にいと高く、四方にとゞろききてきこえたりしが、今は、をり〱の木魚の音もたえはてゝ、何と云ふみ山、何と云ふ名なりしかさへ聞く人もなくなりにけり。

その上人、年老いて、中風と云ふ病にかゝり、年久しうなるも、とかく快からずして、手もえ働かず、足もえたゝず、ものさへえいはず、わづらひてのみつかれゆきけるに、

有り難き師のことゝて、徒弟等、みな心をくだき、かつは、已が道とて、法の聲々くどき立て〵、いのりつ拂ひつすれど、佛の道とても、天命は如何にともするよしなかりけん。病は少も怠らず、重くのみなりまされど、弟子等も、はては、皆うみにうみ、つかれにつかれて、朝夕のかしづきさへ、なほざりがちになりゆきぬれど、いまはいとあはれなるさまとなりぬ。ある時、一人の婦女、み寺をたづねて、弟子にたのみきこゆるやう、妾、此の頃、ほのかにきゝ侍るに。上人久しう病の床にくるしみ玉ふとの事、もし女子の身をゆるし給ひて、御邊り近うまゐらん事をきかせられ給はんには、妾、願くば、御枕邊に侍りて、始終の宮仕へころせまほしきなれ。何とぞ承けひき給ひてよと云ふに、さらぬだに、弟子ども、うみはてにたるをりからなれど、ろなたよりも願はまほしく思ふ所なりとぞかりればねぞ、何かはこぞまむ。しか〳〵と、やがて、師の上人に告げ侍れど、すゝみたまはねど、上人もさすがに、是をゆるさせたまへり。

さて、上人のたやすくうけひきたまひしかど、弟子たちのよろこびはさるものにて、かの女子のよろこびは、殊更。いふぞかりもなく、うちよろこびて、それよりは、始終上人の病の床のべさらず侍りて、春秋の花紅葉は、もとより、よそに、夏冬の暑さ寒

さも、身には少しもおぼえず、ひねもす夜もすがら衣帯をもとかず、攝養至らぬくまなくつくすさま、たゞならぬに、上人は、いとうれしさの身にしむものから、また見も知らぬ人の、かばかりに心をつくしくるゝ事の、さこそはいぶかしくおぼゆらめ、何處いかなる人とも、とはまほしきけしきの、折りふしの目元に知らるれど、婦女は、ただ涙ぐむのみにて、何事もえ云はず、たゞひたすらに、かたを撫で、背をさすりて、いたはりやまず、をりふし人知れず涙を袖に包む如く見ゆ。上人は、いよ〳〵いぶかしくおもはるゝらむ、しば〳〵とはまほしげに見え給ふに、女子も、さすが堪えずなりけむ、あるとき、側近う、人も侍らぬ時をうかゞひ、ひそかに上人に向ひて云ふやう、女子の身にて、唯一人かくてまゐり、願うてかく御側に侍りまゐらすは、さこそいぶかしくおぼすらめ、あかし奉れば、よく〳〵よしある事にこそ侍るなれ。いまた、わかうおはせしをり、おぼしかけざる程にしにふれさせ給ひつる、何某と申すものゝ産みたる、妾は娘にて侍りぬ。幼きをり、母親のそれとも告げらせたまはざりし故、われには、父親はやうなきものとのみ、日來は思ひ居り侍りしに、やゝ大人しうなりてより、ゆくりなくも、尊き上人のゆかりなるよしをきゝ侍りて、たゞ戀しう、なつかしう、いかにもして見參らせ、見えもまゐらせむやと、あけくれ起き臥し心には、つ

ゆゐ忘れず、ゐ堪へずのみ思ひ侍りしかど、あやしき賤の身にて、さばかりにわたらせたまふ大德を、けがし奉らん事のゆゝしう候へど、忍びに忍び居り侍りしに、此の頃、上人の久しうこはき病をわづらひ給ひて、み弟子だちもとかうわづらひ困じたまふと云ふ事を、ほのかに聞き侍りて、かなしう戀しう心もとなさにゐたへず、とゞまらんとすれど、心とゞまらず、叶はぬまでとて、かくは思ひ立ちて參り侍りしに、幸にきかせたまひて、うれしくも御そばへ侍りまゐらする事を得候て、かく朝夕に御顏をも拜され、及ばぬながら、みづから、粥、藥をもすゝめ參らする事を得たるうれしさ、たとへんものもればゐ侍らずかし。たゞ此の上は、れん病のとみにいえ玉ふを見んこそ、今生の願にこそ候なれ。いやしき女子の身にはゞからず、尊き御側をけがしたてまつれる罪をば、あはれ、願ふはとがめ玉はで、御心安う、なほも數にればしめさん事は、仰せつけられんことを願ひ侍りぬと、涙ながらに語りけるに、流石に、世は塵とすてはてたる僧侶の身にも、かなしさのいふばかりなかりけん。墨ぞめの衣しばるばかりにもれはしけるとか。

かくて、なほ、少女は、長き月日を、たゞ一日の如く、孝情怠らず、かひ抱至らぬくまなく、つくしに盡くしたれど遂に天命、かへすによしなき人となりけるに、少女が

なげき、今更にいふまでもあらず。親思ふ心にまさる親心、子を思ふ親の心ばかり、親を思ふ子はあらじ、と、稱ふるものあれど、世には、なほ、かゝるやさしき孝女もありけり。あはれ、銀に黄金にます寶と稱せらるゝは、實に、かゝる孝子の身にこそ。

皆川氏の婢

青山延壽

皆川藤右衛門の婢、其の名を佚す。藤右衛門、水戸威公に事ふ。時に幕府天下に令して、耶蘇の法を禁じたり。某法を犯し、皆川に連り及ぶ。皆川獄に下されて死す、命じて其の族を捕ふ。初皆川の妻將に死せんとするや、三兒を婢に託す。婢竟に其の家に留り、鞠養甚だ至る。既にして三兒獄に下さる。婢悲泣して已まず。倶に獄に入らんことを請ふ。吏許さず。婢曰く、舊主孤を妾に託するの言猶耳に在り、且つ三兒尙幼し、妾無ければ則ち死旦夕に在り、妾坐して其の死を視るより、三兒に先だちて死するに如かず、若し之に從ひて獄に入るを得ば、則ち妾の幸なりと。吏其の言に感じて之を許せり。觀るもの涙を流さゞるなし。婢三兒を奉じて二十餘年、終始一の如し。威公其の節義を賞して祿を賜ひ以て人に嫁せたりと云ふ。（常陸國誌）

家政

いけ花（十九）

田邊和氣子

百合

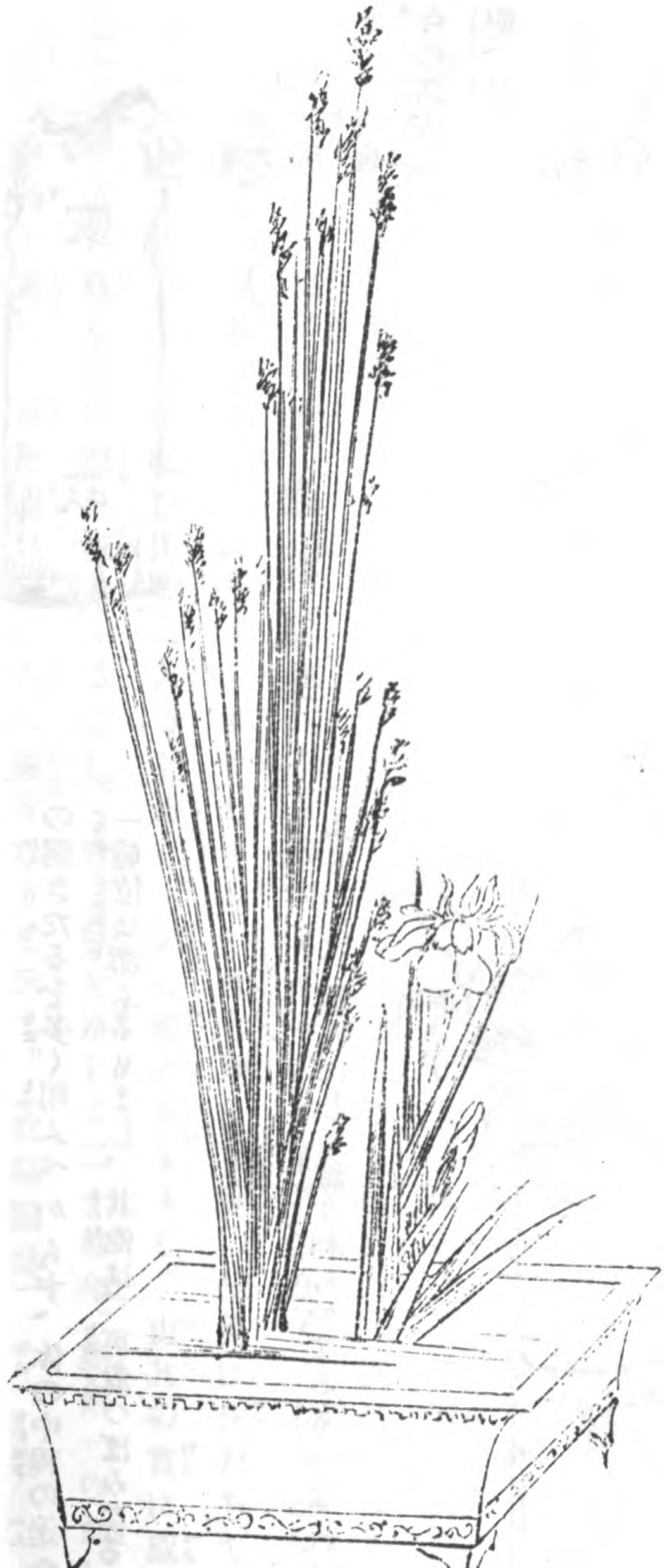
百合の活方は芍藥、又は、菊などに同じ、これも、花數は半數にして、五本、三本、都合によりて活てよし。此の花は、花の付所、三つまたの如くなりて恰好よからぬものなれど、よき程に切り取るべし。花の開きたるを多く用ふべからず、体の中程の邊へ、一輪位は添ふるもよし、其他は、可成つぼみなる方よし。



ふとゐ　杜若

ふとゐは、眞直にして細き和らかなるものなれど、これを、一本も捻ぢざる樣に活るは、やすからざる

ものなり。先づ、眞副の形に長短を定め、下にて切り、恰好よく活てよし。此の活方は、前にものべたる如く、眞副をふとゐにて作り、杜若は、体斗りなれども、いづれも、心斗りの眞副体をかたどるものとす。杜若は、花二本にして、葉にて眞副体を見る様にし、ふとゐとの中程へ葉の出で差支へざる様にすべし。



たちぬひ

西山たい子

己は、袴の方を、早く習ひたれど、袴は、裁ち方の、いと面倒なるものにて、むづかしく、かつ、今は薄團をぬひかへすべき折からなれば、袴は後に譲りて、まづ、此處には、薄團よりものすことゝなしぬ。

（三十八）　三布薄團の裁ち方

三布薄團は、裁ち方も、縫ひ方も、いとやさしきものなり。なみのものは、一反を三つに折りて、その折りしめを切りはなてば、裏表とも通しとなるなり。

（三十九）　その縫ひ方

三布にたちたるものゝ、裏表をみて、布をぬひ合すなり。但し、うらにする方を、一處だけ、二尺か三尺ばかりわけおくべし。而して、皆はぎあはさば、ぬひめにしつけをかけ、堅に眞二つにたたみ、そのまはりを、凡てぬひまはすべし、ぬひまはし終らば、また、そのぬひめにしつけ



をかけ、うらがへして、裏にする方、即ち明けおきし方を、疊につけて、ひろげて、綿を入れ、四すみと、まはりとを、よきほどに、綿と切とを合せてとぢつけ、兩傍より綿をまき入るゝやうにして、明けおきし處よりひきかへし、其の明けある處を絎け合せ、横縦をよく引きのばして、よきほどにとぢつけ、枕しるしをつくるべし。但し、綿は、布よりは、上下左右とも、一寸ばかり大きく出しおくべし。

だいどころ

牛茶

新鮮なる牛肉一斤を得て、其の筋と脂肪分を除き、細に剉み、之を口廣き瓶に入れ三合の冷水と、食鹽少量を加へて口をなし、凡十分間、其の儘置べし。(是れ、冷水と鹽は、よく肉液を引出すか故なり)十分間過たる時、鐵瓶又は「スープ」鍋に前の瓶を(口をなしたるまゝ)入れ、九分通り迄熱湯を注し、凡一時間程沸騰せしむべし。其の際湯減ずれは、始終九分通り迄增し置べし。但し湯煎にかけたる後、凡三十分の頃、瓶の口を開き、肉サジにて肉を出し、塊りになりたるをば能く離し、之を瓶に戻し、又、湯煎にかけ、尙三十分間程置き、茶熟したるを待ち瓶を湯より取出し、其の中の肉液を絞り、若、液中脂肪の浮く時はよくすくひとるべし。斯く製し置きて病人の要むる時温めて與ふべし。但此の分量にて製したるものは四五回に用ふべし。

燕麥粉の粥

三合の牛乳の中に、燕麥粉を大匙にて三培程入れ、

三十分間許、時々攪動すべし。斯くして後、之を漉して、「スープ」鍋に投れ、粉の中に含める乳を能く絞り、文火にて凡十分間攪動しながら煮、能く熟したるを待ちて適宜の鉢に取り、少量の牛酪、及び砂糖を和して、かきまはし、熱きうちに與ふべし。

細切牛肉

上等の「エチボ」肉、又は、犢半斤の脂肪分を能く去りし薄くすき、之れを活火にて手早く炙り、(肉より滴るあぶらを皿に受く) 其の熱けたるを待ち少しさまして、之を細かに刻み、碎肉器にて搗き、粉碎れたる時「スープ」鍋に投れ、前の肉より得たるあぶら、胡椒、及食鹽少量を加へ、温めて皿に盛り、用ふべし。又、細かに刻みたる乾パンを少し添へて用ふるも佳し。

牛乳の良否を試る法

牛乳は新鮮のものを用ふべきは勿論なれ共、殊に病人に與ふるものは、此の點に最も注意せざるべからず。扨牛乳の良否を試るには、試驗紙(藥店にあり)の小片を乳に浸し、其の青色忽ち赤色に變ずれば、乳の中に酸氣ある徴證なれば、之れを與ふべからず。其の色變らざれば、新鮮ものなれば、之れを沸騰させて與ふるを佳しとす。試驗紙は亞爾加里質と、酸氣とを識別せんが爲めに、化學者の用ふるものなれば、牛乳に限らず、液體の酸敗如何を試すに用ひて可なり。

いまのよは　いまのみのりを
かしこみて　けしきおこなひ
おこなふなゆめ
(本居宣長)



日本文典（十三）

鹽井正男

動詞がいろ〳〵なる心ばせをあらはすさま、やがて、動詞にさま〴〵なる性質を作る事に就きて、動詞の語尾にいろ〳〵の辭を添へる事を述べ、ろが中にて「り」と「らる」といふ二辭を添ふる時の心ばせまでを述べたり。もと、これらは、助動詞といふ詞の品を定めいふべき所にて述ぶべきなれど、これゆゑに、動詞がいろ〳〵の具れる性質を有つに至るなれど、ろのありさまを、こゝに大かたをかきおぐるなり。なほ、後に助動詞の所にもいふべけれど、やがて、ろのわたりにいはむことゞも參考せられよ。

三、「る」

この詞を、動詞の四段に活用くものと、奈行變格良行變格との下に添ふる時は、自らが爲し能ふなる動作をあらはす。例へば、

螢や雪の光りにても、書は讀まる。

何時にても去なる

何時までにても居らる

皆、動詞の將然の格の下につゞくなり。讀まは四段活用の動詞の將然の格にして、去なは奈行變格の將然の格なれど、居らは良行變格の動詞の將然の格なることは、孃たち既に知り玉はむ。ろの下に斯く「る」を添ふれど、自らがよく爲し能ふ動作をあらはすなり。讀まるといへど、自ら讀むことが出來るなり。ろの他皆推しはかりたまへ。

此の「る」といふ詞は、また、四段活用の動詞の將然の格の下につゞけて、他より受くる動作をあらはすを得。例へば

敵に打たる　犬に噛まる

敵より犬より受けたる動作をいふなり。斯の如し。また、「る」を添ふる時は、動作を尊敬していふやうになる。例へば「君は書を讀まる」「君は恙なくて居らる」などいふ如し。

此の「る」といふ詞は、彼の下二段に活用する動詞と、れなじやうに語尾を變化するものにて、『レ、ル、ルヽ、ルレ」と活く。而して、其の活用するに從ひてそれ〳〵定まれる格あることも、また動詞と仝樣にして、

終止の格	將然の格	連用の格	連體の格	已然の格
ル	レ	レ	ルヽ	ルレ

といふやうに定まりたり。

四、「す」

この助動詞を、動詞の四段活用のものと奈行變格と良行變格との將然の格の下に添ふる時は、例へば「兵を遣はして、宇治瀬田を守らす」などいふ如く、他の者を使ひて爲さしむる動作をあらはす動詞となる。また「君行かす」などいふ如く、動作を尊敬していふ如き詞ともなる。この「す」は下二段に活く動詞の如く「セズ、スル、スレ」と變化して、その格は

終止の格	將然	連用	連體	已然
ス	セ	セ	スル	スレ

五、「せらる」

ことは、前にあげ來れる「せ」といふ詞と「ラル」といふ詞とを合したるものなり。その變化するさまは「ラル」と全く仝じにして、これを四段に活用する動詞の下に附くる時は、他に然せらるゝ動作をあらは

すやうになる。例へば、「一日に一卷の書を讀ませらる」の如し。而して、「また、敬ひていふべき詞ともなる。例へば、「大纛を廣島に進ませらる」などいふ進ませらるにて知るべし。

六、「さす」

これを、動詞の上二段に活用するものと、下二段に活用するものと、上下の一段に活用するものとの詞などの將然の格の下に附くる時は、他をして左やうにせしむる動作をいふやうになるなり。例へば、

若しきめを見せて懲りさす

學者を賴みて敎へさす

わが子に着さす

馬に蹴さす

などいふにて知るべし。また、動作を敬うていふやうにもなる。「君はつく〲とながめさせれはしますす」

などいふにて知るべし。

この「さす」といふ助動詞は下二段に活用する動詞のやうに、「サセ、サス、サスル、サスレ」と活きて、その變ずるにつれて、定まれる格は

終止の格	將然の格	連用の格	連体の格	已然の格
サス	サセ	サセ	サスル	サスレ

その中に、連用の格のものを一つ取り出で丶示せば、平家物語に

法皇大に御感ありて、門をあけさせてぞ、入られける

七、「しむ」

これを、動詞の四段に活用するもの、或は上一段下二段に活用するもの、及び、變格の詞などの將然の格の下に附くる時は、他をして左か爲らしむる動作をいふやうに成るなり。例へば、

幼稚き時より學ばしむ

これを用ひしむ
女子の道を敎へしむ
こなたに來しむ
疾くせしむ
彼方へ去なしむ
家にのみゐらしむ

斯の如し。これなど活用に屬せる語にても、この「しむ」を附くる事能はざるものあり。また、古言にはかくて、うやまひいふ意ともなる。萬葉集に

信濃路は今の墾路かりばねに
足ふましむな沓はけわがせ

とあるふましむは踏むといふ事を丁寧に恭々しくいへるなり。

この「しむ」も下二段の動詞のやうに變化して、「シメ、シム、シムル、シムレ」と活きて、その格は、

終止の格	將然の格	連用の格	連體の格	已然の格
しむ	しめ	しめ	しむる	しむれ

といふやうに定まれり。今、その中の連用の格の例を示すべし。

すべて、目に見耳に觸るゝことの、一として
哀を催し、心を痛ましめずといふ事なし。

この外に、させとらると連合したるさせらるといふ辭と、しめとらると連合したるしめらるといふ辭とを、動詞の將然の格の下に附くる時は、他よりさやうにせらるゝ動作をあらはし、また動作をうやまひていふやうになること、らるとおなじやうなり。その變化するさまも、らると仝じやうなり。なほ、これらの事は助動詞の所にて詳しく申さむ故に、たゞ大かたにとゞむ。

歌の栞（二）

塩井正男

しきしまのやまと歌といふものは、何なるものにて、いかなるべきものなるか、その性質、その目的などにつきては、一わたりつげまゐらせたり。さて、歌には、句形、語調、長き、短き、強き、弱き、緩なる、急なる、あきらかなる、おぼろげなる、さま〴〵なる態なるがあるべし。さはいへ、そのもとの性質、目的には變る事は無きなり。やがて、わが心に思ひわたれる事から、思ひうかべる思想を、言の葉の色に美しく染めもあらはし出でゝ、さて、わが心、他人の心を樂ましめ、且つは、人の心をいよ〳〵あはれにうるはしき方に導き誘はむとするものなるは、これもかれも、皆おなじかるべきなり。たゞ、うたひあげむとする事から、うたひ出でんとする思想の有樣によりて、自らこれに相應したる句形も語調もあるべけれど、長き、短き、強き、弱き、緩き急き、明かなる、朦朧げなる、さま〴〵の態あるべきなり。いかならむ事からをも、いかならむ思想をも、必ず、毎時もおなじ句形語調を以てうたひ出でんとするは、されど、いとむづかしき事にて、しかも、勞して功なきいたづらわざなり。最近き例をかいあぐれど、彼の萬葉の長歌の五七調の如きは、やゝ壯重雄大ともいふべく、おほらかに重やかに勢ありげなれど、また、七五の今樣調、さては、近きころ新體詩とよぶ七五調のものなどは、優艶流麗ともいふべく、やさしくなだらかなり。それ〴〵自ら長ぜる所あり。故に、うたはむとする事から心からに相應したる調によらざるべからず。なほこの句形語調歌態の事は、いとむづかしきかたなれど後に讓りて、手近なる容易

き方より思ひわたるまゝをかい記るさむ。

一

歌、殊に、彼の三十一文字などの短き歌は、いはむと思ふ心情を、表面よりあらはにうちつけていひ出でず、つとめて、裏面より言葉をまはしていふやうすべし。裏面とて、いはむと思ふ事の反對の事をいへとにはあらず。心情を表にうちつけにあらはさず、その詞の裏に、やがて、その詞の中に引こめて、その心情の籠りたるやうに詠むべしといふなり。例へて申さば、親しき友に別るゝ時の心、或は人の亡くなりにたるを悼む心などをうたはむと爲す時に、悲しけれどとて、たゞ、うちつけにあらはに「別るゝ事の悲しかりける」とか「君が亡きこそ悲しかりけれ」といふやうに、悲しとばかり、うちつけていひ出ださず。そのいひたる詞の中に、自ら悲しといふ心情の籠りたるやうにしたらむが、なかなかに、悲しき心情の深くおぼゆるものなり。語をかへて申さば、悲しい悲しいと口にわめき立てゝ泣きたらむよりは、袖ひきかつぎてふし沈みたらむばかりのけしきによむべきなり。さる方こそ、なかなかに、いふべからざる心情のこもりておぼゆるものなれ。他の一例を取りて申さば、つれなき人に恨みいはむに、世なれたる女子が、うらめしや、妬き人め、にくや、うらめしやと、したゝかにむかひ罵りて恨みたらむよりは、やさしき少女子が、ものはえいはず、たゞふし沈みてむせびかへりしばかりのけしきによむべし。うらめし嫉しと、うちつけに罵り散らしては。なかなかに、あはれもさめておぼゆるなり。歌もさる如し。在原の業平朝臣の歌に、人の戀ひしうて、頻りに忘れがたきに、その思ひをかいやらむとて、祓ひたれ

ど、なか〳〵に戀ひしうのみ思ひまさるに、

戀ひせじと御手洗川にせしみそぎ
神はうけずもなりにけるかな

とよまれたる如くよむべし。これを、紀の貫之ぬしのよまれたる

つらき人忘れなんとてはらふれど
みそぐかひなく戀ひぞまされる

といふに比べなど如何ならむ。そのよしあしは次の號にことわけむ。



老女の鏡にむかひたる

安藤紫光

花の色は移りにけりな。とは。小町が花の姿をたのみに、浮世に誇り〳〵し末の世の言ひぐさなりき。今、この老女、そも古の姿いかなりけむか知らねど、うちむかへる鏡の中の姿は、老の浪幾重ともなく、面にうちよせ、頭には、幾年の霜雪、積り〳〵て、いと白し、今は老さらぼひて、見る影もなけれど、面ざし何となうゆかしく、そのさまもけだかきふし見ゆるに、ありしそのかみ、嘸と思ひやらる。匂ひし花の顏ばせには、幾そくの人の心をかさそひけむを。たをやかなりし柳の姿には、いかばかりか人の心をひきとゞめけむを。その昔の春と、今は夢とすぎて、先に色香催せし雨も、風も、竟には仇

となりしうたてさよ。雨に採まれ、風に晒され、浮世の中にさすらひし事幾十年、野山さびしき冬枯の、今は花散り、香失せて、見かへる人もあらずなりにたる老女の心、そもいかならむ。

古、玉をみがき花をかざりて、うちむかへる折の心地には、誰かは今を思ひ料らむ、その昔、綺羅の衣に包まれ、錦の袂にまとはれて、羨まれけむ程の心地には、いかでかくとは思ふ人のあるべき。おのれも、只花の顔はせをたのみに、柳の姿をよすがに、匂をきほひ、美しさをみがきて、昨日とすぎ、今日とくらし、さて世はかくとのみ思ひあなどりけるが、うたて、年波はゆるしなくうちよせて、頭には、すぎぬる年々の霜雪をかさね、腰は、浮世の憂さの數々にえたえで、梓の弓とまがりぬ。かゝるべしとは思ひかけざりしを。世に榮えてし頃は、幾多の人も思をよせ、媚をもとめしかど、今は見かへる人もあらずなりぬ。あはれ、榮えてし昔は黃粱一炊の夢か。今うちむかへる鏡は、昔ながらに變らねど、影やどすぬしの昔のさまは、尋ねむよしもなし。かゝる姿うつさむとは、げに思ひかけきやとは、是ぞ老女の心なるべき。

わが身世にふるながめせしまに。とは。唯に小町がなげきのみにはあらざるなり。

石川雅望と鈴木朖　　三浦千春

雅望は江戸の人、六樹園と號し、雅言集覽などの書を著し、世に高名なり、朗は尾張の人、離屋と號す、和漢の才に富み、鈴屋門にて屈指の學者なり。おのれ先年、この六樹園のかける、寢覺のすさびといへ

る隨筆に、離屋翁の書入れある本を見たることあり、今其の中よりいさゝか抄出す。

○源氏物語の註者の詞に。凡そ四書五經は人の耳に遠くして、仁義の道に入りがたし、いはんや女房どものために其の德益なし、されど、先人の耳に近く、又、人の好む所の、淫風をかきあらはして、善道の媒として、中庸の道に引き入れ、終には中道實相の悟に入れとし入るべき方便の權敎なり。又、ある人の說に、此の物語、専ら人情世態を述べて、かみ、中、しもの風儀用意をしめし、事を好花によせて、美刺を言葉にあらはさず、見る人をしてよしあしを定めしむ、大旨は婦人の爲に諷諭すといへども、おのづから、をのこのいましめとなる事多し。又云、皆其の世に有りし人のうへをのべて、勸善懲惡を含みたり、此の本意をしらずして、誨淫の書とのみ見る輩は無下の事なりとぞ。

雅望云。これらの說、みなしひごとにてうけがたし、此の物語よみて、淫奔の心はおこれるとも、いかで敎戒のやくとなるべき、あまりに式部をほめんとせる心より、かゝるひがことをもいふなりけり。かゝる物語のをしへとならざることは、式部が書けるものにも見えたり。螢の卷に云、紫の上も、姫君の御あつらへにことつけて、物語はすてがたくおぼしけり、こまの物語の繪にてあるを、いとよくかきたる繪かなとて御らんず、ちひさき女君の、何心もなくてひるねし給へる前を、昔のありさまおぼし出て、女君は見給ふ、かゝる、わらはどちだにいかにざれたりけん、まろこそ猶ためしにしつべく、心のどけさは人に似ざりけれ、ときこえ出で給へり、げにたぐひ多からぬことど

もは、このみあつめ給へりけんかし、姫君の御まへにて、この世なれたる物語など、なよみきかせ給ひそ、みそか心づきたるもの丶むすめなどは、をかしとにはあらねど、か丶ることと世にはありけりと、見馴れ給はんぞゆ丶しきやとの、給ふとあり。こは、か丶る物語は、女子の教とはならで、なか〳〵に世にか丶る事もありけりと、おのれがこ丶ろにゆるして、あだなるかたに心ひかるべかめれは、女子にはよみきかすまじきふみなりと、いさめ給へるなり。さらむ、警戒のためとはならで淫奔のなかだちたるべき事、式部がかけるをもて證とすべし。

朗云。此の事は我が師の、玉の小櫛に委しくいはれたり。雅望しらでかくいはゞ、固陋なり、知りての上ならむ勦説なり。師云く、此の書は、教戒のふみには非ずとして見れど、又教戒となれる事多し、といはれたる、是よき説なり、紫式部は、世にすぐれたる賢智の人にて、心なきにはあらざるべし。

又云。(みなれ給はんぞゆ丶しきといふ詞の所に)此の詞も物語に、ふせぎをすべき心得の戒なり。今の人。兄を、あにき。をぢを、をぢき。などいふことなり

雅望云。多武峯少將物語に、太刀はきたる人みても、これやてゝきなど、は丶きのもとにればせぬ、我をいだき給はぬとてなげき給へど云々。と見えたり、うつ保物語藏開の巻にもこの詞ありとすればゆ、さらむふるくより、いひきたれることとなりけり。

朗云。きは君なり、いぬき、あてきのきも君なり。

さる賤きものを君とは如何。答、今下婢をさして、貴様といふがごとし。汝も本は貴む言葉なりしが、後はなめしき詞になれるが如し。（未完）

和歌の教授法

獨來生

國家鞏固の基礎は、國民の國家的観念にあり。而して、國語の勢力を大ならしむること、祖先の思想、感情、ことに、我が國土風物の如く、千載異變なきものにつきて起しゝ感情を知らしむるとは、この観念培養の上に、大効あるものなり。仰ぎて、とほく、神代の古をおもへば、素盞男尊、一たび、須賀の宮に、風雅の道をひらきたまひしより、歴代の才士、雲の如くに起り、その神妙の思を、三十一字に發するもの、いよ〳〵多くなり來りて、勅撰、家集の書、汗牛充棟をいたせり。盛なるかな。そも〳〵、和歌よ。上は天文、中は人事、下は地理、顯には、山川、草木、幽には、神道、人心など、そのうたふ範圍、きはめて宏濶なり。その辭句にいたりては、簡單にして、述ぶるところ、要粹を得たれば、領解記憶に、便よろしく、節奏瞭喨として、誦吟に佳なり。また、含蓄ふかく、旨味とほければ、玩索のたのしみあり。今、祖先の思想、感情を知らしめ、國語の美妙を悟りて、これを愛好する心を起さしめんとするには、和歌をすてゝ、はた、他に、何をかもとめん。さらに詳說すれば、和歌は、その美なるものを撰びて誦吟すれば、物我の見をわすれ、憂鬱の氣を散じ、仁愛の念をおこし、從容不迫の襟度をつくり、樂天知命の徳にすゝましむ。何となれば、その中、同情的興味、審美的興味、哲學的興味を催起誘發するも

の、多量なればなり。これに由りて、これを觀れば、和歌の、教育上における地位は、言はずして明ならん。しかれども、その教授の法、よろしきを得ずば、いたづらに、翰墨を弄し、日月を、悠優の間におく、世事を委棄して顧みざらんとす。ふかく心せざるべからず。之を要するに、歌を教ふるは、歌人を作らんためにあらず。心を養はんためなり。かつ、歌の解釋は、なるべく、道德的なるべし。これ、教師の、最、注意すべきことなりとす。

世に、和歌の教育的價値を說く人なきにあらず。しかれども、たゞ、或部分、即、教訓の歌をあげて云云するのみにして、いまだ、和歌の全体に關して、その價値を考ふる人、蓋、鮮きが如し。今、すこしく、管見の在るところを言はんに、まづ、歌の種類、七あり。一には教訓、二には詠史、三には愛情、四には感懷、五には人生、六には自然、七には雜なり、敎訓歌と、詠史歌とは、辯ぜずして可なり。これを省くべし。雜歌は、他の歌の解釋法を見ば、おのづから明ならん。煩をさけて、また、これを說かず。たゞ、愛情歌、感懷歌、人生歌、自然歌の四につきて、順次、これを辯ぜん。

愛情歌

予は、他愛的感情に基けるすべての歌、即、慶賀、弔慰、愁歎、離別、戀愛（君臣、父子、夫婦、兄弟、師弟、朋友などの間における）の歌を、この名目の下に置くなり。人の喜をよろこび、人の憂をうれふる情は慶賀、弔慰の歌によりて養ふことを得べし。また、愁歎、離別の歌によりては、平生における相互の交際を、敦厚にせしむることを得。しかして、戀愛の歌によりては、他愛的感情の眞味を知り、吾が

――誠――の何たるを悟りつべし。

ひさかたの天見るごとく仰ぎ見し
　皇子の御門のあれまく惜しも

この歌は、上の句にて、皇子の御在世中、作者が、いかに尊敬し奉りたりしかを想像するに足るべし。人を愛しては、その屋上の烏におよぶとかや。されば、作者が、皇子の御門の荒れ行かんを歎くありさまにて、その忠厚惻怛の情の深かりしことは知らるべし。君に事ふるもの、このまごゝろなかるべからず。この歌をよむもの、身、作者の境遇にあらば、この感情を起すべしや、否やと、自己に体認すべきなり。云々

かゝらんとかねて知りせば大御船
　泊しとまりにしめ結はましを

無常の世に居りて、後日をのみ期すれば、後悔すること多し。君の、神去りまし〻後に、しめ結はざりしことを、いかに悔ゆとも、せんなし。人は、常住不斷に、誠心を以て交際すべきものなり。しかれども、人情怠りやすし。つゝしむべし。云々

諸共に泣きてとゞめよきりぎりす
　あきの別は惜しくやはあらぬ

別にのぞみては、泣くもあり悲しきも、去るものは、日にうとしといふ如く、いつしか、薄情になるものあり。心のうすらぐは、自然の勢にて已むべからざるも、せめては、行爲の上におきても、輕薄ならぬやうと心すべし。云々

忍ぶれどいろに出にけりはが戀は
　ものやおもふと人の問ふまで

この歌は、男女間の歌にて、ことに、夫婦間の

歌ならぬは、事實なれども、敎育上にては、かやうの歌は、盛德の君子をおもふ歌、または、父子、君臣等、相想ふ歌と見て說くべし。すべて、非禮と見ゆる歌は、みな、かくの如く說かんこと、予の持說なり。たゞし、歌によりては、牽强に失するものあれど省くべきも、はた多かるべし。今、この歌をとかんに、

中庸に、夫微之顯。誠之不レ可レ揜如レ斯夫。易に、鶴鳴二九皐一。聲聞二于天一。とあり。中心に、君子をおもひ、君をおもひ、母をおもひ、子をおもへど、言はず、語らざるも、物やおもふと、人に問はるゝまで、容貌、擧動の上にあらはれ來るものなり。かくあらはるゝ程にてこそ、誠に、人を思ふと　いふべけれ。人の、學問、事業、道德に熱心するも、かどかりにならずど、眞の熱心にあらずと知るべし。また、世には、みだりに、自己の學識、才能をしめさんとして、時、處の義をもかへりみず、言行を大にするものあり。しかれども、盛德の士は、勇に、意なくして勇、仁に、意なくして仁、智に、意なくして智なり。ゆゑに、義を失はずして、眞の智仁勇となり、求めざるに、名も、自然に至るなり。近頃の人の歌に、――楯の上にうちやすらひて月までど後の山に鳴くほとゝぎす――といふあり。月をまつに、性急にするも、甲斐なし。楯の上に゜う゜ち゜や゜す゜ら゜ふは、大に佳なり。かくて、月をまつに、待たぬ杜鵑の聲さへ聞こゆ。これ、君子が、安然として、義に由り、求めざる名の、自然に至る風情あり。ゆゑに、誠あれど、おのずから、現る。妄動することなかれ。妄動する

ことなかれ。云々

思ひつゝぬればや人の見えつらん
　夢と知りせばさめざらましを

思ふことは、かならず、夢に見るものにあらず。されども、つゆ思はぬこと、知らぬことを、ゆめに見るものにもあらず。孔子、夢に、周公を見たり。云々……夢中にも、惡念、惡行をなさぬは、世になれど、心修れるなり。夢中にも、恐怖することなきに至らば、意志、鞏固なることを得べし。夢によりて、わが心の品格を考ふるも、進德の一策ならんかし。云々

旅人のやどりせん野にしもふらば
　わが子はぐゝめ天のたづむら

親の心は、かくの如し。子たるもの、ふかく思はざるべけんや。云々

ことし行くにひさきもりがあさ衣
　かたのまよひは誰かとり見ん

これ、また然り。多言を要せずして明ならん。云云

慶賀、弔慰の例、みな、これに准へ知るべし。

（未完）

明治廿九年第八回文部省國語科撿定試驗問題　答案試稿

師岡須賀子

作文　譯文

文治二年四月八日、二品、并、御臺所、御二參鶴岡宮一、以レ次、被レ召二出靜女於廊一、是、依レ可レ令レ施二舞曲一也。云々。

（答）こは、東鑑にある文なり。この文、普通文、又は、和文に譯したるもの世にいと多かれど、態

と略きつ。

解釈

第一　歌よむと思へる人のやがて歌にまつはれをかしきふることをもはじめよりとりてみつゝすさまじき折々よみかけたるこそものしきことなれ云々（女鑑第百八號六十八頁參照）

（答）こは、源氏物語、帚木卷品定段馬頭の論中にあり、評釋、其の他註釋書多かれど、これも全じくなむ。

第二　爰に爲朝敵の勢でしに見れど云々（全上）

（答）こは、保元物語、白河殿攻落す事の條にあり。下知とは、命令、司令、號令などの意なり。内兜とは、兜の内なり。件は、彼のといふほどの意。打上げは、弓を目の上て打ち上ぐるなり。弓矢取る身の謀とは、武士の計略なり。汝は内の御方へまゐれは、義朝は　後白河天皇の御所へ參れの意。我は院方へまゐらんは、爲義は崇德院の御方へまゐらんなり。汝負けど憑め助けん我まけど汝を憑まんは、子の義朝若し負けなど、義朝憑みたと助け得させん、若し又、父の爲義負けなど、義朝を憑みとせんとて、父子約束して斯くは、立ち別れ給ひたるならとなり。神妙は、殊勝、奇特、感心などいはんほどの意なり。

第三（イ）　祁布與利波　可敝里見奈久弖意富伎美乃之許乃美多弖等　伊泥多都和例波

（答）けふよりは　かへりみなくて　おほぎみのしこのみたてと　いでたつわれはなり。
こは萬葉集の歌なり。
おのれ今日よりは、一家の私事はかへり見ることなく、大君の醜の御楯とならん爲、出立つよ

となり。醜は見惡き事也、謙遜の意に用ゐたり。
第二十卷、常陸國部領防人火長今奉部與曾布の
歌なり。

(ロ) そへにとて　とすれどかゝり　かくすれど
あないひしらず　あふさきるさに

(答) こは、古今集俳諧歌なり。
世の中のことは何事も不充分なるものにて、種々思案して、斯くと考へ付きしことを行へど、又、一方にさはりあり、又、さりとて一方にすれど、又、片方にさはりあり、俗に、あちらをたてればこちらが立たずと云ふほどの意の歌なり。

第四(イ) 小松の御門ことにふれてきやうさくにれはします

(答) 小松のみ門とは　孝光天皇を申奉るなり第五十八代の帝なり。小松の宮に久しくましくたれど、かくは稱へ奉るなりと。御諱　時康仁明天皇の第三の皇子にれはします。きやうさくは警策にて(若二策之警一馬)の意なり。こゝは、萬事に御感能にましますとの義なり。此の語大鏡の二の卷昭宣公の條に在り

(ロ) 御衣などもたゞけしのかにしみかへりたりあやしさに御ゆするまゐり御ぞきかへなどし給ふ

(答) けしのかは、芥子の香なり。護摩の香物なり。ゆするとは、髮洗ふに用ゐる湯をいふ。こゝは、髮洗ひ浴などすることなり。　右何れも、平安朝時代の語なり。此は源氏葵の卷にあり、六條御息所生靈になられしところ也。

(ハ) さては一家の郎等でさんなれ汝を射るにあらず大將を射るなり

(答) でさんなれは、こそあるなれの音便の約なり

といふ。

(答)(二)廉耻を忘れ金銀を好み候なとは沙汰の限に候
沙汰の限とは、善惡を沙汰すべき限にて、言語道斷ともいふべき語なり。これらの言語は鎌倉時代尤行はる。

設　問

第一　文法　母音　子音　促音　拗音の定義を與へよ。

(答)文法とは、言語の法則に從ひて、正しく美しく、文章をつゞることを研究するものをいふ。
母音とは五十連音中の、第一阿行の五音をいひ。
子音とは、余の九行の各五音をいふなり。
促音とは、二音以上の言語の間にて、促まる如くきこゆるをいふ。(もつとも)(はつきり)(まつたく)の如きを皆いふなり。拗音とは、五十連音中の第二韻なる、いきしちにひみいりゐと、第二韻の、うくすつぬふむゆるうとは父音となりて、やいゆゑよとわゐうゑをとを母音として、各一の音をなせるものをいふ。こは古來の日本言語にはあらず、外國語の輸入してより、我か國語の上に加はれるものなり。

第二　にへとのがものをのあらゆる用法を示せ、

(答)には、接續、抑揚、雜辭等なり。又、古くは、(たつきを知らに)の語く不然辭にも用ゐたり。第一格の係辭となる語なり。
へは、雜辭にて、にと全じく、方角を指す辭なれども、これは大方に云ふときの辭なり(東京へ行く)(西洋へ行く)の如し。
とは、接續辭にて、斷れたる語を接續すると、雜辭にて、或る物と或る物と、並べて云ふとき

の辭と二つあり。‖のは、連辭と、雜辭とあり。連辭は、(秋の田の刈穗の庵の)の如きをいひ、雜辭は(花のさきた‖る)(月のさやけき)などの如きをいひ、係辭第二格の語ともなるなり、‖がも、‖のと仝じく、連辭と、雜辭とありて、(霞が關)(柳が枝)などは連辭なり。(行くがたの‖しさ)(よむがられしさ)などは雜辭なり。これも第二格の係辭なり。‖もは、物を合するときの辭にて、古くは、歎息の、か‖なの‖なを、‖もとしても云へりしなり。第一格の係辭なり。‖をは、(妹まつ我を‖)(あらざらましを)‖の如く云へぞ、歎辭なり。(本を讀む)(人を助く)の如きは連稱辭なり。(ぬれてを‖行かん)(見てをわ‖かさん)などは、强辭なり。然して、これも第一格の係辭なり。是等の事、文法書は委しく說かれたれどことさらに略けり。

(未完)

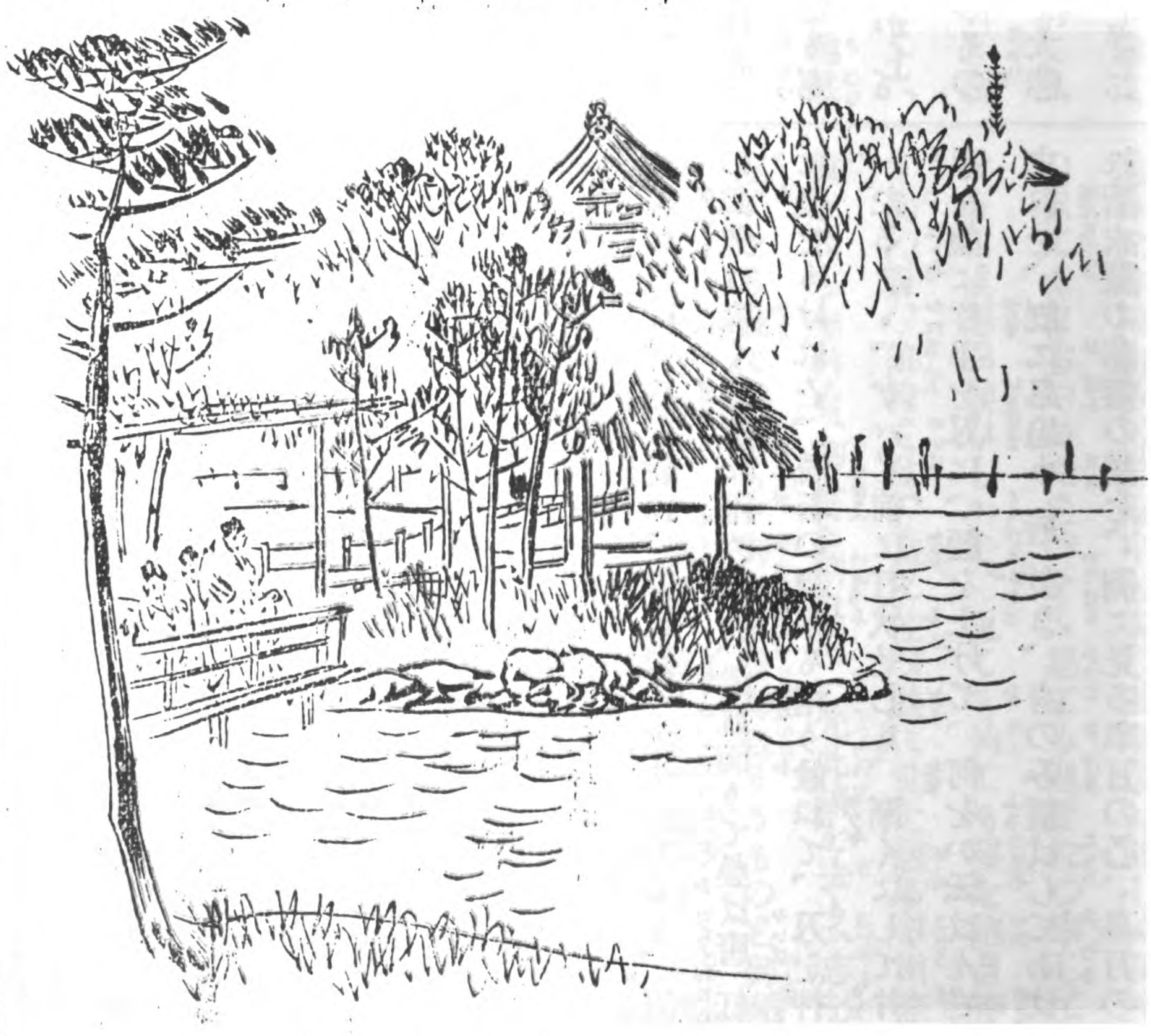
東京二十四景 (二)

蓬の屋女史

淺草公園

鐘は上野か淺草かとさへうたはれて、上野公園の東に近うきこえたるは淺草の公園なり。月花のながめには乏しけれど、かの風雅とやらん月雪花の雅客の杖をひく處にはあらざめれど、都のにぎはひ興あるもののみをあつめたらんやうの處にて、はかなき女子子供たちには、この上もなく目なぐさむべき所なめり。觀世音の御堂の軒をめぐりては、鳩と云ふをかしき鳥の數多住みて、豆などまきやれど、うれし

げに下り來りて、馴れひろふさまのめづらしさ。童心にはさこそれもしろからめ。か丶ればば鳩にまきやる豆麥など賣りて、日々のなりはひをたつる嫗もありけり。また御堂より下りて左の方奥山と稱する處には、漢の世の承露盤もかくやと思ふばかりに、雲を凌ぎて立ちたるは名も凌雲閣。十二階の頂にうちのぼり望遠鏡の下に立てば、玉しく都のけしきは、一目にあつまり、品川わたりをゆく白帆の彼方には近う房總の山々を見るもめもはるなり。また池をめぐりて、此方彼方に立てつらねたるは、生人形、かるわざ、球のり、山がらの藝等の見せ物小屋なり。いづれおとらじものと、つゞみ、大鼓、笛、喇叭、箏、ひちりき等をうちはやし吹きたつる音、空にひゞき、地にと



どろけど、げに女子童の心は動きもゆくべく、彼方の池には赤き青き魚どもの、とび上り、はね上りて、人のあたふるふを食ふもをかしけれど、此方にはまた猿がくさりにつながれながら、きやつ〳〵とさやぎ狂ふに、人參大根などとらするを、頰をふくらして食ひよろこぶさまなどのをかしさ。さて、また池をうちめぐりて中店といふわたりに出づれど、赤き家の、幾軒となく、連りあるに、手遊屋、小間物屋、菓子屋等みなうつくしくある限りをつくしてかざりたつれど、心ある大人まで目とまるばかりなれど、女子子供は、げに一入なるも道理、おなじ人形も喇叭も、此處のはいみじきもののやう思ふもをかし。中にも正月七月の中の日、つぎの日、その他のもの日、あるは觀世音の命日とて、十八日などは、大悲を仰ぐものを初めとして參詣するものおびたゞし。中店を出でて東の方には、吾妻を名にさへせる都の名橋それうち亘れど、都の鳥もすむなる隅田川、春秋の花月をとふものは、大方は此の公園に立ちよる方多し。

落花（七）

柴田千稻

第八　悲しまんとて生れし身か

さらぬだに、病の爲に、身は衰へ力失せたるを、刄の鋒先は深く脇腹に潛り入り、濃血滴りて疊は唐紅に染まりけれど、流石の親家も堪り兼ねて、刄を押へたるまゝ、ガバと前に打伏せしも、漸くにして片手を疊に片手を刄に、顏を上げて、何をか云はんとすれど、既に息迫り唇乾き、身のみ震はしてあはれ斷末魔の悲慘の樣を、側に見る皐月の心、皐月の

胸や如何ならん、眼は涙にくれて見えわかず　胸は塞り、心は消えて、身は我身にもあらぬ樣ながら、匍ひ寄りて後より夫の身を抱きしめ、己が帶引き裂きて疵口をしかと纏ひ、蒼ざめたる顏さしのぞきて、聲震はしつゝ掻き口說く、其の不愍さ、天沈み地眠りて、窓外時ならぬ　落花二三瓣。

親家は疵口を抑へて、顋もて皐月の悲しむを制し、又も何をか云ひ出さんとすれど、舌しぶり、唇震ひ、あはれ沈まんとする氣力を漸々に振ひたて、苦しげなる息をはつと吹きて、やよ皐月、涙を拭ひ心を鎭めて、我が云ふ言を能く御聞きやれ、初め我が戰敗れ軍負けて既に腹掻切らんとせしか、思ひ返して後の頼を力とし、心ならずも戰場を落ち延び申す道すがら、思はぬ野武士の脅に逢ひ、止むを得ずして其首領とれぼしき者を切つて棄てしが、後御身に逢ひたる時初めて知り申した。其首領は正しく御身の叔父でれぢやつたと。アヽ過てり逸またつ事してけりとは思ひ候ひしかど、兎ても角ても望を抱き申す此の身、御身とは、共に住び共に世を送る事出來難うれぢやれど、御身と別れて一先此場を去り、志を遂げたる後に、必らず御身に言譯致ろうものと御身の留むるをも聞かず、御身の嘆くをも顧みず、一度は蹶然として立去り申せしが、跡に心の引されて、女々しき事ながら歸り來り樣子を伺へど、事は案外に出でて何れの者か御身を捕へ去らんとするに、一刻も猶豫し難く、踏み込んで此の危難より御身を拯ひ、遂にかく共に住む事となり申した。其の時我が心中の苦悶は語るにも言葉がれぢやらぬ。アヽ我が身は御身が叔父の敵なり。御身こそかゝる事とは知らで我を夫と思へ。我は確に御身の敵なるを知り居

れり。御身の敵と知りて御身と共に住まふは、我が心の忍び難き所でれぢやる。御身をして叔父に對する不義の子となすが爲さるかは、實に我が心の如何にありと思へば、不便ながら御身と離れて我は立去らねばならぬ。さりとて我が再び去らば、御身は元より存へたまはぬとは確に知り申せり。そは、先きに我が去りし時、御身が短刀を取りて決心したるによりて知り申した。是に至りて愚なる我が心は迷ひ我が思は搔き亂れ、心弱り氣力失せて、さめ〴〵と此處に留る事となり申した。後よりこを思へば、實に過を再びしたるのでれぢやる。若し此の時御身に、我は叔父の敵なるを告げ、如何にすとも、妹脊の契結ぶ事能はざるを知らしめたらば、假令御身は死ぬとも、義を知らぬものとはならざらましを。我が心の愚なるより遂に御身をしてあらぬ苦を重ねしめあらぬ者とならしめた。これ皆、我が身の至らざるにあらで何でれぢやらう。時あらば御身に詫びん、折あらば御身に分疏いたさうと、今日まで空しく日を送り申したが、假初の病は思ひもよらず募り申して、最早や此の世に望がれぢやらぬ、生きて不忠の臣不義の士とならうよりは、死して惡魔となりて賊臣を滅ばし申さんと思ひ立ちたるは、明日今日の事でれぢやらぬ、御身の見ゐ給はぬ折々、刄を取りて拔き放ちし事もあつたが、御身の眞心を思へば死ぬるも不愍、事も云はで腹切らば、後まで如何に悲しみ嘆かんと、臆れ〴〵て今日只今、我胸に釘を刺れし新田の公達の御旗上、甲斐なき此の身の口惜さ無念さ、胸裂け血沸き早や一時も堪らばこそ、かくは、腹切り裂き申した。れ、れ泣きやるな、御身の持つたる刄にて我が腹貫きしは、聊か心にかゝりし我が罪の

分疏致す爲でおぢやる。喃皐月、御身は、武藏の野邊の露と消え給ひし叔父の敵を首尾克く打ち申した。善くぞ討ちしぞ、夫親家、は、ほめて遣はすぞ。叔父も嘸かし草葉の陰で喜んでおぢやらう。え、何を何時迄も女々しう御泣きやるぞと、云ひ終りて息絶え／＼なり。

皐月は夫の言葉を涙の中に聞いて、何思ひけん顔を擡ぐると共に、咄嗟夫の脇腹貫きし刄を執つて、アナヤ我が咽笛切り放たんとするを、不意に驚きたる親家は、痛手ながらも流石に逸速く、片手差伸して、刄を握りし皐月の手をしかと抑へ、眼を瞯と怒らして苦悶の聲を放ち、し、しづまれ皐月、な、なに事の狼狽ぞ、な、なんと致すぞ、あぶなし、放ち候へ、さ、放ち候へと申すに、え、あぶなうおぢやるはと、刄もぎ執りて摚と突き放てば、皐月は身を轉ばしてワッと泣き伏し、狼狽とは御情なき御言葉、物に狂ひも致さず心は確に候ぞ。喃我夫、共に此の身を殺してたべ。我が夫、死ぬるを許してたまはれ。み、みのがして死してたべ。何れは死ぬべき此の身、一時遅るれば一時の罪重なり候ものを。御慈悲ぞ。深く此の場にて死してたべと、前後不覺に泣き沈みしが、やがて顔をあげて夫の側近く膝を進まし、云はんとすれば胸塞り、歔欷る涙をやう／＼に押拭ひ、か丶る悲しき目を見んとて、我が身は此の世に生れ出ざりしを、前世に如何なる罪業や積みけん、早くより父母に死別れ、天とも地とも頼む夫に生別れ、寄る邊なき浮草の身の水のまに／＼流れ漂ひしも、只一度生別れまつりし夫に逢はん爲め、悲しみを堪へ辛きを忍び、幾度も死なんとせし身を存へしも、頼む心は一筋に夫に逢ひまつらん爲なりしを。あはれ

其の時身を惜みて存へざりせで、今かゝる悲しき目は見ざりしものを。其の後思はぬ所にて思ひもよらず逢ひまつり女の心の淺墓さに、夫の御心の内は悟りもせで、嬉し樂しと只徒らに日を送りしが、嘸かし心なく云甲斐なきものと思召しけん秋去り冬來り春立ちて、思ひもかけぬ御病、最早や我が望足り志遂げしかで、今は用なき此の身、夫に代りて殺してたもれと、神佛に祈りまつりしは昨日今日にあらざりしも、怨めしや此の身は存へて夫はかゝる御有樣に沈みたまひしとは、世に神も佛もましまさぬか。又は我が眞心を足らじとればしてか。あはれ其の時、此の身の命を迎へ取りたまはゞ、今かゝる悲しき目は見ざりしを。畏けれど怨みまつるは神佛、義理に纒はれて天にも地にも代へ難き夫の身さへ、妻の我が身の手にかけまつるとは情なしとも悲しとも、世にまたとかゝる果報はかなき身のあるべきか。悲嘆を嘗めよとて生みたまひし身か。不良の妻となれとて生まれ出でし身とか、掻きくらし降る五月雨の空に血を吐く杜鵑の聲、天に叫び地に轉び、正體なく〳〵かき口說く皐月の樣を、苦痛煩悶の中より親家は哀れ不愍と思ひけん。熱き涙を泣き倒れたる皐月の脊の上にはら〳〵と落しぬ。やがて頭を揮ひて涙を打ち拂ひ、閉ぢたる兩眼を漸くに見開きて、慰さめんと思ひてか、少しく瞤り動く途端、黑き紫の血は纏ひて疵口を漏れて湧くが如くに迸り出でぬ、呼吸は再び迫り來りぬ。迫り來る呼吸はやゝややに細り行きぬ、絕ゑなんとして僅につなぎとめし玉の緖は再び絕ゑなんとす。眼はくらみ魂は遠ざかり、遂に妻の膝の上に折重なりて倒れ伏しぬ。アナヤと驚きたる皐月は、覺ゑず悲泣をあげて縋らんと

する時、俄に響き來る陣太鼓の音関の聲、何處とも
しらず殷々として轟き渡りぬ。此の物音や耳に入り
けむ、絶えしかと思ひし親家はムックと起き上り、
彼方を屹と睨み詰めて乾きたる唇を嚙みしめたる
儘、撞と後に倒れぬ。
屍体に縋りて血に泣く皐月の聲のみ絶間なく聞え
ぬ。雲落ちて雨は蕭々と降り來れり。

村雲（その六）

白魚女史

母樣居らせ給ひてか、かづにて侍り、つげもまゐらせで遠く遊び侍りて、さこそ案じたまひても、いからせ給ひてもれはしけめ、かへすぐ〵あやまち侍りぬ。重ねては侍らじ。今日ばかりはゆるし給ひてよ、母樣。あな、いとうも固う閉ぢ給へるかなとつぶやきつゝ、あけんとすれど、えあかず。母と妹とものなくがやうなる聲のよゝと聞ゆるに、やよ靜子、そなたも此處にか、姉なり。此處あけてよ、あけてよ。母樣、かづ子にて侍りと呼べども呼べども、答へはなく、母のなくねのいよ〵急に聞ゆるに、かづ子は、何となう胸とゞろかるゝまゝ、何とてかう固う閉ぢ給ふと云ひつゝ、力の

限り襖ひきはづせば、こは、そも如何に。母がふり上ぐる短刀の下に、靜子がものしづかに覺期のけしき。かづ子は見るより膽も魂魄の消えはて、聲もえたてず、あはてゝ走りより、母の腕にとりすがるに、靜子は、初めて目をひらき、あなめづらしや姉上樣、あらじとのみ思ひ侍りきと流石よろこびてすがらんとするを、母親はかきのけて、靜子、迷ひぞ。まぼろしぞ。正しき姉にはなきものを。亡き魂魄なるは、髮の亂れ、顏の色にも知れてなり。のうかづ子、云ふ甲斐なき母をもちたる故に、あたら花の盛りを散らしたる、さこそうらめしう迷ひもせられてならんが、われも、靜も、やがて同じ道に行くなれば、恨みも、いかりも、彼の世にてはらせよと云ひさま、すがる手をふりきりて、靜子さらば、なれも迷はでと、またもふりあぐる母の短刀、あぶなやとばかり取りすがりて、辛うじて、奪ひとり、暫くは涙も出でず、つく〴〵とながめたりしが、やがて、おろ〳〵涙にかきくれて、母樣、母樣、御心を靜めてよ。いかにかし玉へる。かなしや〳〵、靜子、ろちまでが、何として此のやうなる恐ろしき刄の下にはてんとはする、さばかりに御心をいためまつりしか、愚さよ。やよ靜子、愚な姉を助けて、なにとて共に母樣をなぐさめては玉はらね。今一度もとのやうにならせ給ふやう云ふてよ。さても〳〵よく〳〵の妾が罪、身の罪をば亡ぼさんと思はじく

たゞ母様の仰せ給ふやうにならんころ、誠の道にて、神などたのみきこえでもすむべかりしを、おろそかなる迷ひより、もしも、白糸の瀧に我が身をかけても見ん、罪もけがれもきよまる事もあらんかと、夜な〳〵に忍び出でたる曉、遂に前後も知らずなりはてしにてだに、神も佛もなき印は、さるかりしを、よく〳〵愚なる身は、いよいよ迷ひのみ行きて、あぶなかりし命を、ほど近き御寺の僧にたすけられ、やう〳〵心付きし後も、なほ迷ひは去らずして、あまつさへ、七日ばかりにては、あまりに短しとさへ思ひこみ、なほ七日の日數をと、まどひを重ね、家に歸りては、再びは忍び出るに便りなしと思ひて、一度は立ちかへりてど、ひじりのさとすをも、教ふるをもきかず、やう〳〵に二七日の心願すましたる心地して、只今歸り來るまでも、かばかり思はしわづらひ給ふとは、思ひもかけず、たゞ如何に我が子にても、今は必ずいふがひなきものとのみいからせ給ひてならんと思ひて、わずらひ居る靜子をたのみて、わびも云ひときもなしもらはんと思ひ、その部屋に行き見てもあらず、誰にてもたのみてんと呼びたてたれど、女子どもゝ居らざるに、面あつうはあれど、自ら母様に聞えまつりて、幾重にも〳〵、わびなむと思ひたる淺き子心、不孝の子心にはひきかへて、深うも〳〵數ならぬ身をればし玉はる母様の此のおすがた、思へば〳〵憎きまよひ、何

と云ひてわび奉らむ。のう靜子、いたつきある身をなぐさめんともせず、愚なる姉は、やうなきもの思ひのみかけ、妾ばかりの親にもあらぬ、大事の大事のうちにも母樣なるを、此のやうに御心狂はせたる罪、嘸やにくみても、にくみても、あく方なく思ひてならん。思へばわれながら此の身あさまし、にくし、誠に口惜しき事をしてけりとばかり、身もうくばかりになき沈む始終の言の葉をうちきゝて、さては、幻影にも亡魂にもあらぬか。さては夢にや、夢ならずやとばかりよろこびすがり、泣き沈むかづ子を抱きいたはり、我こゝろは、いふ言の葉なけれ。とくべき道なし。さても、誠にかづ子にてか、亡き魂魄にはあらずか、夢にはあらずか。夢ならばなさめそ、魂魄ならば消えでと、抱きあげ抱きあげ、さすりつ、なでつ、よくこそ歸り來て給ひたれ、憎き母をうらみ給はで、かへりてはたまひたる。其方の歸られたるばかりに、靜も殺さですみにきと、母もよろこべば、妹もすがりて、妾こゝろは、いとううきめを見せ侍りしか、これよりはとばかりによろこびまとふに、姉もやうやく心おちつきて、母樣、もはや、何も何も、妾はさとりはべりき。誠に母樣の仰せ給ふやう、おのづからにゆかりばあるもの、よき人ある松丸君の事は、もはや、ふつと思ひたち侍る。妾故にたたんとする大丈夫の命をつなぎとめられんやうはからひ給ひてよと云ひ出づるに、母





親は、今更に身を責むる涙、かづ子、ゆるしてくれ。ろは、此の母がつくりし詐り。さるからに、その罪を消さんとて、人々をも出しれきて、靜もろともに、ならくに罪を消さんと思ひたるなりと云ふを、いな母樣は知られぬ事。姉上樣、もとは皆妾の心のさびとそかりに、やつれたる面を、からくれなひにそめにたる日より、野も山もれもしろう木の子がり、栗ひろひと、あこがるゝ姉妹を見るやうなりにたり

その後、かづ子は來ん春に歸へらるゝ松丸を待ち、靜子はあらためて武雄の方に行く事となり、母親の傍に、二人とも、女子の道れくれてはと、裁縫ひの業つとめはげみぬ。

（をはり）

文林

夏月　德大寺實則

手にならす扇のかぜもゆふづきの
かげさすまゝに忘られにけり

獨聞郭公　東久世通禧

郭公さもあやにくのはつ音かな
ふたりね夜のあけ方のそら

河夕立　佐々木高行

柴舟のゆくへをれひてすぎにけり
八十うち川のゆふだちのあめ

樹陰蟬　高崎正風

なれもまた涼しき陰やもとむらん
枝うつりしてせみのくななる

山新樹　鍋島直大

夏山のこずゑを見ればあをばより
ほかの色なくなりにけるかな

湊川懷古　黒田長知

湊川みなはときえしろのかみを
れもひ汲みてもぬるゝ袖かな

林新樹　津輕承昭

遠山も見えぬばかりにしげれるは
はひろかしはのはやしなり鳧

夜卯花　長谷信成

山里のかきねのうつきさきしより
やみにも月のかげを見るかな

夕水鷄　宮地嚴夫

川そひの宿のともし火かつ見えて
あしまのくひな鳴きそめに鳧

梅雨晴　植松有經

五月雨の雨はあとなく晴れたれど
野川のみづはいまだにごれり

源義光　三輪義方

武士のみちのほかなるみちのなも
たかくきこゆるあしからの山

壽老人の眠れる圖　木庭芳香

世の中を眠りてすぎんさむるとも
たのしと思ふこゝろもたねど

松風村雨　佐々豊水

すまのうらあかしかねたる眞心は
神もあはれとみそなはしけん

松田左近の妻　仝人

父の身にひき比べけんたをやめか
こゝろのはしら仰がざらめや

窓前の螢　黒崎仙太郎

風ふけはしげれる草のまどちかく
こぼるゝ露はほたるなりけり

閑中述懐　石原均

世をすてし身にさへつらし年波の
たつせもはやくすぐる月日は

夏雲　蜂須賀随子

蚊遣火のけぶりの末と見るはかり
つきにかゝれる夜半のうき雲

浦郭公　末松生子

夕まぐれ浦のまつむら分けくれは
つきより高くなくほとゝぎす

風前螢　柳原愛子

ともし火を風のけちたる窓になほ
残るひかりはほたるなりけり

夏月　税所篤子

うたゝねの枕にやどるかげ見れは
夏こそつきはしたしかりけれ

螢　小池道子

庭にとぶほたるの影のおもしろし
こにいれたるもいざ放ちみん

田上螢　北島以登子

河かせに吹きおくられて小山田の
さなへの上にとぶほたるかな

夏露　伊達泰子

夕だちのなごりの露の置きためて
みどり色そふなつ木だちかな

水鷄何方　小笠原艶子

ゆけどゆけど聲まだとほく聞ゆなり
何かたになくくひななるらん

里早苗　三宅龍子

山ざとの小田のくぬぎのかけ深み
あつさをよそに早苗とるらん

夏露　河村重子

汗あゐてこゆる山路もしらかしの
つゆちるあさは涼しかりけり

夕水鷄　安東菊子

夕月のひかりさしたるかどの戸を
たゝくが如くなくくひなかな

書窓螢　鹽井ふく子

いにしへを猶忍べとやよもすがら
ふみよむ窓にほたるとぶなり

窓螢　鹽井さく子

よもすがら窓のべさらず照すなり
なにをほたるの心なるらん

月前納涼　清水靜子

風きよみ松のこかげにすゞみして
かたぶく月のかげを見しかな

橋邊螢　清水喜久子

夏くれど橋邊とびかふほたる火は
道行くひとをてらすなるらん

湊夕立　内田遊歌子

舟人のとまふくひまもなかりけり
八十の湊にかゝるゆふだち



●御救恤金の御下賜　畏くも　兩陛下には、此度海嘯の災に罹りしを聞召されて、いと憫然に御思召れ、岩手縣へ金一万圓、宮城縣へ金三千圓、青森縣へ金千圓を御下賜相成りたり。あなかしこ

●御所高等女官一同幷に皇后宮大夫の義捐　岩手宮城、青森三縣下罹災者救助として、御所高等女官一同、幷に皇后宮大夫より金五百圓、仝青山御所女官一同より金三百圓を義捐せられたり。

●海嘯の慘狀

先月十五日、三陸地方海嘯の慘狀は、なか〳〵に筆紙の寫し能はざる業なるべし、家屋家財の流失し、或は破壊せられたるはいふも更なり、可惜生命を失ひし者の數は、巖手縣にて二萬二千人、宮城縣にて三千人、青森縣にて四百人、合計二萬五千四百人とぞきく。其の他負傷せしもの、數も知られずとなり。此の海嘯の起りしは、午後八時頃にして、其の打ち寄せ來る前は沖合俄かに轟然として雷の如き音して、やがて山の如き怒濤迫り來り、遂に此の慘況を來したるものにて、罹災の中心點なる釜石の如きは水の高さ十丈余に達したりとなん。かゝる慘憺たる災害の中には、一として哀むべく哭すべきものならぬはなし、其の中にて、ことさらに聞くも憐れなる二三の話をあつめてこゝに載せん、孃たちこれを讀みてその當時のありさまを察し給へ。

○姉、弟を助けて慘死す　釜石町の質屋にて、相應の財産家たりし老人某は、海嘯の當夜、其の身の

み逃げ出でしも、家族の事氣に掛りて引き返し來りたるに、長女が水中より頭のみを出して「阿爺好く來て下さつた私は二人の幼弟を助けたさに片腕片足を失ひましたが弟等が助かればモウ死むでも本望です」と涙ながらに、氣息絶ゑ居る二人の弟を渡せしかど、父は先づ其の弟二人を連れ出して水を吐かせしかど、孰れも幸に蘇生したれども、憐むべし、姉娘は、暫く余命を保ち、翌朝に至りて死亡したりと。アヽ誰が同情の涙を灑がざるものあらん。

○慘の極　一婦人某激浪に押されて、大木の枝に、腸を裂かれながら、枝に懸りて、翌日の午前十時頃まで息絶ゑざりしと云ふ。可哀慘の極。

○避難の途にて出產す　年の頃卅二三の婦、兼て姙娠中なるが、此の凶災の爲めに、辛うじて逃げ出でたるが、其の途中出產し、母は其の子の顏をも見ず怒濤に打ち上げられ、赤子のみは呱々と聲を揚けて獨り山の中腹に在り。當時の母の心情を察せば、覺ゑず涙浮ぶ。

○恩愛の情　一婦人某此度難に遭ひて背後の高丘を攀ぢ行きしか、アヽ思へは最愛の娘は如何にせしか、定めて進退谷まり、居るならんと、母子恩愛の情にはたされ、走りて其の居宅に至るや否や、再度の激浪襲ひ來り、遂に敢へなくなりにけり。然るに、娘は一歩母よりも早く、山上に在りて難を逃れ居りしが、跡にて母の事を聞きてさらど、余も生きて甲斐なけれど、追つ付御伴せんとて、泣く〳〵嘆き居ると云ふ。聞くも涙の種なりけり。

○小女泥下より出づ　海嘯のありしより四日目、諸所に殘れる潰倒の屋を引き直し、或は泥の中より發掘せしに、圖らざりき、泥沙の中の潰家に女の叫

ぶ聲聞えぬ、工夫等驚きて之を發掘し見れば無慘や
九歲許りの小女、柱の間に挾まりて、生殘れり。見るも憐れに瘦せ衰へ居たりとなん。

○小女一晝夜亡母の死骸に泣く　海嘯の當夜、十二歲の小女と、二歲の兒童を殘して、憐れ潰家の下に敷かれて臂を股り股を折り慘を呑みて死せる一族あり。然るに、其の翌十六日、生き殘りたる十二歲の小女は、脊中に頑是なき二歲の兒童を負ひて、亡母の死骸を抱き、悄然淚を湛へあらん限りの聲を揚げて、母を呼ぶこと一晝夜傍人是を慰め諭すも聞かず、遂に亡母の傍に困死せしが、漸くにして人に扶けられ、蘇生せりと。悲慘腸を斷つべし。其の他、首切れて流失し、胴のみ殘りたるもあり、或は一家悉く頭を並べて死亡せしあり。僅に赤子を止めて他は皆死亡せしあり。老爺一人を殘せしもの。妻を殘せしもの。夫を殘せしもの、其の悲慘は一々記すに遑もあらざるべし。

●宮中御歌會　去る五月、宮中に於て御催しありし御兼題は左の如し。

湖上螢

夏のひのなからの山もくれそめて　螢とふなりしかのたはわた　高崎正風

さゝ波のれともすゞしきゆふやみに　螢とふなりにほのうみつら　毛利元德

しかのうみすなとる海士かほす網の　めをぬひつゝもとふ螢かな　津輕承昭

から崎のまつよりたつる白露の　たまかとみえてとふ螢かな　慈光寺有仲

さゝ波のしかのうらわに舟うけて　ふけゆくまでも螢をそみる　清岡長說

さゝ波にかけをうつしてとふ螢　光りたゝよふにほのうなはら　水野忠敬

さゝ波やしかのうらわのあしのはに　清岡長延

露とみゆるはほたるなりけり

さゝ波の志かの大和田くらきよを
おのれてらして飛ほたるかな　町尻　量弘

夏もなほひらのねおろし寒きよに
螢とふなり志かのからさき　柳原　愛子

志ほやかぬうみの上にもゆふへく
みをこかしつゝとふ螢かな　樹下　範子

から崎のまつのかけよりみゐろめて
みつうみとほくゆく螢かな　税所　敦子

鮒つりてかへるかたゝのうら舟に
行ちかひてもとふほたる哉　小池　道子

よひやみの星にましりて水海に
螢のかけもうつりける哉　北島　いと子

おなすゝしいふきおろしの風さきに
螢なかるゝあさつまのうら　黒川　眞賴

さゝ波のよるのふなちをてらしつゝ
せたのわたりに螢とふなり　六條　有義

漁火のかけかとみゐて鳰のうみの
ゐりのわたりにとふ螢かな　清岡　長吉

おしのうみみきはの杉のこすゑより
志たゝるつゆは螢也けり　坂　正臣

くれわたるおはつの濱のともしひも
うつる波間に螢とひかふ　小出　粲

いし山の螢かりすとみやこ人
やはせの浦に舟よろひする　植村　有經

みやこ人螢かるらし志賀のうら
おしわけ小舟よるも見えけり　大口　鯛二

さゝ波の志かのうら風更にけり
螢のかけもさむくなるまで　鎌田　正夫

たまくしげふたこおろしの風さきに
螢みたるゝおしのうみつら　千葉　胤明

すゝみにはまた早けれとせたのはし
螢みんとやひとりとふらん　遠山　英一

なきさこくあさつま舟にかりねして
ひとよ螢のかけやみてまし　鶴　久子

●東京府高等女學校新築落成　東京府高等女學校は、本年初より、神田橋際に新築に着手し、其の工事中今川小路二丁目の專修學校を借り受けて授業し

居りしが、同假校にては、万事手挾にて、先月以來新入學を謝絶し居る程なれば、頻りに工手を取り急ぎ、此の頃全く落成せしにより、取り敢ず新校舎に移轉して、本月一日より、授業を始め、近日の中に、盛大なる開校式を擧行する由、また夏休以後は、生徒の定員を増加し、ます／＼規摸を擴張する筈なりといふ。

●よくにたるうた　なりとて、女鑑愛讀者の一人なる或る孃より寄せられたるまゝを

六月大祓

（千代田歌集第一編）

みそぎしてかへる袂に吹く風は
こゝろもともに涼しかりけり

（女鑑第百十一號天のうた）

みそぎしてかへる袂のゆふ風に
こゝろまでこそ涼しかりけれ

又同一なる御うたうと思へるまゝ

（柳原愛子の御うた）

つくろはぬ賤が垣根に咲きつゝく
卯つきの花のおもしろきかな

（女鑑第百九號天のうた）

おもしろく卯つきの花の咲きにけり
とりつくろはぬ賤がかきねに

●女學草子なでしこ　第一號　神田、進修社より發行せり。其の名のいとやさしげなるもをかし、論説には、小中村義象氏の、女子教育、坂正臣氏、の初刊の一言等載せられたり。談叢欄の宮澤壽美子女史の新世帶は、そが發行の趣意なりと云へる、國風の精神を發揮すといふには如何のものにや、さはあれ、家庭教育の發達を計らんとて、此の誌の出て來しは最も目出度きことにこそ。

社告

本社は今まで、諸方の姫たちよりおくらるゝ、兼題の歌文の、締切の期日までに、到着せしもの、中より、特にすぐれたるもの三四首を撰み出して、天地人の三才に配し、其の撰みに當り給へる方々へは、それ〴〵定めの如く、（天三部、地二部、人一部宛）本誌をおくり參らせ、其の他はすべて、到着の順に紙上に掲ぐる例なりしが、近き頃は、歌文の數いたく增りて、歌は常に、數百首に上るやうなりにたるに今までの如く、僅かに三四首のみ撰ひ出さん定めにては、殆んど、同趣同向にして、甲乙を定めがたきほどのものも、一は撰歌として、賞品を受くる上に特筆せられ、一は到着の順に、なみ〳〵の者の中に列ね記さるゝ事となりて、撰みにもれし人々の心にも、いかばかり悔しからんと、思ひやらるゝによりて、今よりは、天地人の外に、秀逸といふをおきて、三才の撰みにはもれたれども、なほ、並々のものにはすぐれたるものを拔き出で、其の次に書し、その他をば從前のごとく、到着の順に從ひて、列ね記すべければ、この心を得て、今まで、撰みにもれ給ひし人々も、ふるひて詠み出でたまへかし。

歌にまれ文にまれ、題ごとに別紙に書し、文字は鮮明に、仮名は萬葉假名を用ひず、普通のもののみを用ひ、又、歌一首の上に、上の句の中に、二ところの漢字二字を用ひ、下の句の中に、二ところの漢字一字を用ひて、左の書式の如く認め、發行日より十日前に必ず、本社にいたりつく樣おくられたし

書式（用紙は半紙形にて、歌は一人二首に限る）

題　　住所　姓名

初句、……二句……三句……
四句……五句……

初句……二句……三句……
四句……五句……



七月五日兼題　樹陰納涼

天　出雲國飯石郡一ノ宮村　山根久子

なく蟬の聲はこすゑにのこれとも
　ゆふかせすゝし松のしたかけ

地　筑前國嘉穗郡飯塚村　廣田とめ子

植ゑおきし人のなさけを思ふかな
　あつさわするゝ松の木かけに

人　岡山市八幡町　降田まき子

明日もまたきてや涼まん常盤なる
　松のこかけはなつとしもなし

秀逸　（二十首）

吹く風のたもとにあまる松かけは　住山せの子
　夏のよそなるところなりけり

夏のみかよのうきふしも忘れけり　遠藤千勢子
　まつの木かけに夕すゝみして

岩清水むすはむさきも吹くかせに　柳田さと子
　夏をわするゝならのしたかけ

川そひの樹のしたかけのゆふ風は　舘脇ます子
　身にしむはかり涼しかりけり

たひひとも草刈る子らも夏の日を　諸井くら子
　よけて木陰にすゝみするなり

秋こぬと思ふはかりになつやまの　森川いね子
　木のしたかけは涼しかりけり

たちよれはこゝには夏もなかり鳧　奥原ふく子
　みとりしたゝる松の下かけ

涼しさのいつこはあれと千歳ふる　北島松子
　椎の木かけにしくものそなき

そよとたに袖ふく風はなけれとも　櫛田よし子
　夏をよそなるならのしたかけ

すゝしさは風はかりかはなく蟬の　永井さい子
　こゑもしくるゝ松のしたかけ

ひかけうときなつ山まつの下陰は　林久子
　さなから秋のこゝちこそすれ

繁りあふ青葉のかけにたちよれは　水津　すけ子
夏さへさむきこゝちこそすれ

吹上のはまかせすゝしわすもきて　平田　すま子
なつをわすれん松のしたかけ

風きよき木の下かけのすゝしさに　香川　英子
夏をわすれてけふもくらしつ

友をさそひけふもきに飽涼しさに　田津木　久子
たちうかりけるならの下かけ

すゝしやと柳のかけに立ちよれは　眞鍋　直子
われよりさきに人もすゝめり

夏のひのくるゝをまつの下かけは　田代　艶子
秋かとはかりかせのすゝしき

人みなのこゝろ／＼にすゝむかな　久松　勢伊子
すきのしたかけ松の木のもと

川ろひの松のこかけにたちよれは　水野　ふみ子
夏をよろなるゆふかせのふく

我か園の木立ちのかけの涼しさに　大谷津　琴子
子もりかてらにすゝみする哉

――――（いと）――――（以下原稿到着順）

風ろよく大木のまつのしたかけは　會山　みち子
夏にしられぬところなりける

れくやまにたきのひゝきを松陰に　神田　樂子
きゝつゝをれは涼しかりなり

風そよく松のこかけにたちよれは　神田　鈴子
そらにしらせぬ秋こゝちする

松かけの清水かもとにたちよれは　西村　登羅子
すゝしきかせのわく心ちして

風ろよく若葉のかけに立ちよれは　野田　千代子
ろらにしらせぬ秋かせのふく

里かはのやなきのかけに糸たれて　木村　兼子
つりする人はなつやわするゝ

玉川のきしのこかけにふねよせて　西村　芳子
つりする日こそ夏なかりけれ

茂りあひて日影ももれぬ松の下は　神田　靜子
かせふかぬともすゝしかりけり

風そよく青葉のしたのゆふすゝみ　楠　精子
なつを忘れて日をくらしつる

たくさとる賤の處女もつとひきて　島田　好子
しは／＼すゝむならの下かけ

かせ清きもりのしたかけいと涼し　荒井　波子

はやくも袖におきやかよへる

茂りあふ木の間をもれて夏のよは　近藤秀子
つきのかけさへ涼しかりけり

なつころも重ねまほしく思ふまて　青木繁子
まつの木かけの風そすゝしき

何處にか夏はありともしらかしの　高橋信子
しけるこかけにゆふ涼みせん

ふき送る水はみえぬとかはそひの　秋園露子
くぬきのかけは涼しかりけり

ふきおくる梢になつのいろみえて　白井糸子
夕へすゝしきまつのしたかけ

鮎のとふたまかは岸のやなきかけ　秋園菊子
つりする人はなつなかりけり

夏の日は玉のうてなもなにかせん　細井球子
この下かけそすゝしかりける

うちそよく松の下かけ立ちよれは　岡田なみ子
空にしられぬあきかせそふく

繁りあふ木の下かげにあつさをも　碓井信子
しらて涼しくけふをしのきぬ

木かけには秋やきぬらん涼しさに　碓井武子
なつのあつさも忘れはてけり

こゝちよく風吹きわたる木の下は　濵口直子
夏のあつさもうちわすれけり

ひさかりは眞柴折りしく賤の男の　成田延子
ならの木かげそ心ちよけなる

足引のやまゝつか枝にかせおちて　水島良子
むすふ清水になつそわするゝ

しげりあふこかけなかるゝ岩清水　松原常子
すめるこゝろはなつそ涼しき

あめはれて木の下がけにちる露の　芝田源子
たましく庭そすゝしかりける

たきつせの岩打つ波のおとたかく　吉川貞子
聞くそ涼しきまつのしたかけ

ことのねに千歳の聲をふき添へて　町田しげ子
いともすゝしきまつのした庵

水無月のそらとしもなし吹く風の　吉川國子
音もすゝしきまつのしたかけ

おくやまの木かけに結ふ假いほは　中島房子
なつをよそなる心ちこそすれ

晝の間のあつさをよそに忘れつゝ　澤田俊子

いこふ木かけの風のすゝしさ

ならのはのそよくまに〳〵月影の　青山みを子
もれて涼しさいやまさりけり

ゆくさきはまた遠けれと路のへの　小川金子
木かけはすゝし夏しらぬまて

ふきわたる風の音たになけれとも　園田くら子
木の下かけはすゝしかりけり

日影さへもれしと思ふ木の間より　根岸英子
をり〳〵水はかよひきにけり

日をさふる林かくれにたちよれは　仁井田とみ子
涼しきかせのれくはしられぬ

いつくなる隈に暑さのかくれけん　北山切子
木かけは夏とれもはれぬなり

日影をももらさぬ森のしたかけは　岡田よね子
いつも夏なきこゝちこそすれ

てらす日をよろにへたてゝ綠ろふ　高非孟子
もりの下かけすゝしかりけり

契らねと人こそつとへ小野の中に　櫻井花子
ひともとしげる槇のしたかけ

ならの葉のかげ立ならし風までは　佐々有鄰子

なつのあつさをふき流したり

なつ木立しけれるかけの涼しさに　關千代子
わふきの風もれもはさりけり

秋きぬとれもふはかりに涼しきは　關とら子
わをはにしける木々の下かせ

日さかりのわつさも松の下かけは　甲斐莊優子
また夏ならぬこゝちこそすれ

なく蟬の聲わりなからなつこたち　住山幾子
しけれるかけは涼しかりけり

またちらぬ秋の風かとれもふまて　住山靜子
桐の木かけはすゝしかりけり

そよ〳〵としける汀のやなきかけ　菅谷とく子
夏としもなきゆふかせろふく

夕すゝみ木の下かけのさむしろに　黒澤みつ子
うたゝねぞかり樂しきはなし

青やきのいと〳〵涼しきかはきしに　山田ゑい子
舟もこゝろもつなかれにけり

露ふかき杜の木かけにたちよれは　小幡富美代子
またきに秋のこゝちよきかな

やすらへは夏の外なるところそと　菅谷こう子

れもふはかりの松のしたかけ

陰ふかき杉生かもとに來てみれは　小山　せき子
またきに秋のかせかよふなり

庭の面のならの葉そよく夕くれは　鎌田きくの子
音きくたにもすゝしかりけり

日かけみぬ木かくれ山の下ゆけは　佐藤かめを子
なつともわかぬ風吹きにけり

茂りあふ松のこかけにやすらへは　河野　多加子
浮世の夏はしらすそありける

夏やまの木の下かけにすゝみして　河野　八重子
かへさも今はわすれけるかな

れもふとちつとひし松の下すゝみ　星野　かづ子
浮世わすれて月もまもたるゝ

ちはやふる神の木たちの下かけは　星野　仁子
こよなきまてのすゝみなり鳧

すゝまんと高まつ陰にたちよれは　田代　綾子
なつにしられぬ夕かせそふく

風かよふ松の木かけに立ちよれは　武重たけし子
ちりくるつゆにぬれて涼しき

かへるさは夏としもなし風そよく　武田　粲子
このした陰のゆふすゝみして

かせそよく木の下かけの涼しさを　澤邊　淸淑子
いかてかへさの家つとにせん

繁りあふ木の下かけのすゝしさに　花山やすゑ子
夏のころともれはゑさりけり

いとあつきけふ此の頃もわか宿の　花山みさを子
庭のこかけはすゝしかりけり

みとりこき木の下かけの涼しさに　廣瀨　きく子
あふきわすれて歸りけるかな

二見かた夕なみたかくうちよせて　土肥　仙子
あつさわするゝ磯のまつかけ

なつ山のいつこはあれと岩しみつ　三浦　時子
わきてすゝしき松のしたかけ

土さへもさくる斗りのあつき日も　平山　ふさ子
くれてすゝしき木々のした陰

木下陰吹きくるかせのすゝしさに　池谷とみ子
夏をよそなるこゝちこそすれ

水枝さす木の下かけのすゝしさに　杉浦　糸子
夏のよそなるこゝちこそすれ

ゆふたちも日影もちらて茂りあふ　田中　冬子

木の下かけそすゞしかりける

なつ山の木陰すゞしきかせの音に　吾妻ちか子
しはしやすみて歸るそまひと

ならの葉のしけみにそよく夕風は　小曾路しう子
夏よりほかのものとしるかな

すゞしさのいつれはあれと山里の　山本きよ子
こかけをわたるつゆのあさ風

さし入し夕日に庵はまかせおきて　高内よね子
憩ふ木かけのいとゝすゞしき

凉しさに夏なかりけりみわたしの　藥師寺雪子
うなゐらとはき松のしたかけ

つゆしめる松のこかけの下すゞみ　満津澤富子
むすはぬ袖もすゞしかりけり

あふちゝるこの下蔭のゆふすゞみ　満津澤八重子
夏ものこらぬこゝちこそすれ

あな暑しあつしといひし暑さをも　山崎靜子
わすれて凉むまきのしたかけ

立ちよれは木蔭凉しくたをや女の　小町谷里江子
せみのは袖にゆけかせそふく

茂り生ふならの木かけはいと凉し　小町谷園子
こゝや夏なきところなるらん

凉しとて立ちより見れは風吹くと　師岡千代子
いとひし花の木かけなりけり

苔つたふ岩ねのしみつ手すさひに　太田貞子
むすひてすゞむ松のしたかけ

時のまもわかてはなたぬ團扇をも　今藤なか子
わすれてかへる森のしたかけ

凉しさに暮るゝもしらてありし哉　高橋てる子
なつをよそなる松のしたかけ

しはしとてやすらふ蔭の凉しさに　梅本文子
たちさりかたきもりのした道

青葉もる風もこかけにたちよりて　三崎松子
すゞむゆふへは夏としもなし

すゞしくもこの手柏のしたかけに　田中りん子
やとりて夏をわすれぬるかな

かけふかみひるも梢のつゆちりて　羽田三緒子
たもとすゞしきしひの下かけ

咲く花に春はいとひし木のもとに　河田いし子
若葉あふきてかせをまつかな

枝しけき松のこかけにたちよりて　川口政子

夏もわすれてすゝみけるかな

すゝみすと人はきにけり椎かもと　横田波磨子
しひてすゝしき風はふかねと

ならの葉にいかなる風の通ひきて　楢木鋼子
木のした陰のすゝしかるらむ

風かよふ松のこかけにすゝむまは　青木森子
さらに夏なきこゝちこそすれ

あらかねの土も濕りて見ゆるなる　名取正代子
木の下かけはなつとしもなし

たへかたき暑さも早くさりにけり　原三緒子
みとりしたゝる松のしたかけ

しけりあふ木陰の風のすゝしさに　小森さた子
うちは持つてもやすみける哉

陰ふかき軒のさくらのしたかけに　北村てい子
涼しきゆめをむすひけるかな

日かけみぬ靑葉かくれのこの陰は　北村孝子
夏にしられぬところなりけり

川そひのすきのこかけに休らひて　小野田登宇子
たもと涼しくなりにける

風かよふそともの山のまつかけは　小野田のふ子
夏をわするゝところなりけり

立ちよれはすゝしかりけり柳かけ　大溪繁子
あつさも今日はわすられに鳬

風そよくならの木陰のゆふすゞみ　戸原せん子
ころもてかろくたばゐける哉

夏しらぬ木の下かげのすゞしさに　戸原とね子
みちゆく人もあしやとむらん

松杉のこかけすゝしくゆくみつに　戸原みき子
夏もなかるゝこゝちするかな

涼しさにひと夜木陰にねてゆかん　戸原さく子
みとりの苔をむしろにはして

れのつから心もすみてすゝしきは　靑羽逸子
ときはの松のこかけなりけり

ひをさふる松のこたちの高けれむ　靑羽茂枝子
風ふかぬまもすゝしかりけり

茂りあふ松のこかけのすゝしさに　靑羽松枝子
秋かとはかりおとろかれぬる

常磐木のしける木蔭は目にみゐぬ　鷹野静子
秋やかよへるかせのすゞしき

一葉たにまたちらねとも涼しさは　池内さたゐ子

あきかとそもふ桐のしたかけ

ふく風のいつこそあれと涼しきは　杉山かね子
みさをゝかへぬ松のしたかけ

涼みすと人はこのころつとふなり　野中ゆき子
なつにしられぬ松のしたかけ

あへき來て森の木蔭にやすらへは　野中あさ子
風すゝしくてなつとしもなし

夕すゝみならの木蔭に日は暮れぬ　下元茂登子
葉こしの月をそてにやとして

たへかたき暑さなかして清水わく　矢野高子
山まつかけにけふもすゝみぬ

たへかねて松の木蔭に立ちよれど　樹下やす子
なつとしもなく涼しかりけり

友とちと誘ひかはしてゆかはやな　原いち子
田中のもりはすゝしかりけり

いとはやも秋や通へる吹くかせの　谷山松枝子
涼しくなりぬまつのむらたち

茂り合ふさくらはやしの下すゝみ　佐々木千鶴子
いとひし風をまつゆふへかな

涼まはやならの葉茂きしたかけは　増田すゑ子
夏にしられぬかせかよふなり

堪へかねて木の下蔭に立ちよれは　松尾こと子
家路もなつもわするはかりそ

夏木立しけれるかけのすゝしさに　小山はな子
人ことにみな立ちそやすらふ

茂りあふ木のしたくらき霄やみの　百瀬八代子
月なき夜半もたちすゝみつゝ

堪へかねし暑もいまはわすれけり　百瀬かつ子
しける木蔭にしたすゝみして

夏の日もしけれる松のしたかせは　勝もゝ代子
秋をさそへるこゝちこそすれ

游ものを身に堪へかたき夏の日も　萩原しける子
木蔭はかせのすゝしかりけり

吹く風もいとゝ涼しくゆふつきの　上條よし子
さすしたかけは夏なかりけり

夏の日にすゝしきかたを尋ねつゝ　小島小蝶子
しらす木蔭にわれは來にけり

日をさふる楢の茂みのしたかけは　土川田鶴子
またきに秋のこゝちこそすれ

夕たちのなこりなるらん若葉かけ　土岐米子

吹きくる風そすゝしかりける

たまほこの道ゆく人もとまるらん　伊東 みよ子
わきのこゑするまつの下かけ

立ちよれはたもと涼しくなりに鳧　半谷 いく子
ひとむらしける楢のこかけに

夏のひたみちゆく人のたちよりて　粟田口 信子
あつさわするゝ松のしたかけ

わかはして茂る木陰にたちよれは　渡邊 すけ子
夏はいつこかわすられにけり

友とちと松のこかけにまとゐして　藤原 しけ子
かたるもすゝしなつの夕くれ

夏の日をうしといへるは木蔭ふく　齋藤 さく子
風しらぬまのこゝろなるらん

すゝみにと我がよりくれは日暮の　大谷津 きよ子
聲もみにしむなつこたちかな

立ちよれは夏をも更にしらかしの　松野 操子
しけみをかよふ風そすゝしき

夏のみかあつさもいまは忘れけり　牧野 貞子
ゆふ風わたるならのしたかけ

風そよく松の木かけのゆふすゝみ　竹内 くに子
しはしは夏をわすれけるかな

すみたかは岸のやなぎのした蔭は　高田 清子
夏にしられぬかせかよふなり

足引のやまゝつしけきこかけこそ　井出 すゞの子
風はなくともすゝしかりけれ

風かよふ軒はのまつのしたかけに　濱口 弘子
あつさかいやる袖のすゝしき

ゆあみして若葉の本に立ちよれは　大久保 みち子
しはしわれには夏なかりけり

かけふかきたゝすの森に今日も亦　大溪 あき子
夏をわすれてくらしつるかな

蔭ふかく茂る木かけに立ちよれは　御代 忠子
晝のあつさもわすられにけり

杉むらは木かけ寒けしゆくみつに　畠山 千代子
夏もなかるゝこゝちのみして

打ちつれてすゝみにゆかむ松蔭は　畠山 百合子
ゆふへすゝしきあき風そふく

しるしらぬ人にもなれてやなき蔭　畠山 ゆき子
ゆつりあひぬる夕すゝみかな

さらてたに夏もすゝしき松かけに　前澤 幸子

まつとしもなき風かよふなり

しけりあふこの下蔭はなつなから　柚木　理子
夏のはかなることゝちころすれ

杜かけをそろゝろありけは夏ころも　得田　仲子
吹きくる風ぞすゝしかりけり

夏山のこのしたかけはたまほこの　伊坪　ふき子
みちゆく人のいのちなるらん

繁りあふ木立のもとにたちよれは　田巻ひでよ子
なつのはかなる風ろよくなり

川そひのやなきのかけに糸たれて　萩原　章子
魚つりをれはなつとしもなし

よそに見て思ひしよりも涼しきは　有坂　いう子
たなかのもりの木陰なりけり

あへき來てそろの椎木の陰とへは　有坂　淸子
あつさにかふる風も吹きけり

いつのまにねむりさめけん我か心　富田　まさ子
しけれる森のかけのすゝしさ

なつのひのあつさ忘れて涼みけり　和泉　政子
つゆふきちらすもりのした風

さら〳〵と麻の薄きぬ吹きかへす　矢島　やす子
木のした風ろすゝしかりける

かはそひのやなきの陰の涼しさに　平山　峯子
はやあきかともたもひける哉

今日もまた涼みてましも思ふとち　矢島　とく子
しのふか岡のもりのこかけに

さして來しところならねと風戰く　吉村　みな子
靑葉のかけはすゝしかりけり

七月五日兼題　朝がほ（天地人及選逸のほかは原稿到着順）

天　山梨縣甲府市山田町　名取　正代子

花としいへども、いづれめでたからぬはなけれども、中につきていとどあはれにはかなきがうちに、樂しみ多く、且其色のめづらかなるは、朝がほになんありける。さるは春の花の如く、ひとつ色もて長く咲くものにはあらで、朝な〳〵色あらためて咲きにほひつゝ、露のひぬ間もかりのさかりなることそ、いともあかぬ心地のせらるれ。日たけぬれば、やう〳〵しぼみそむるをもて、朝とくれきいでゝながめざらんには、花のさかりを見ること能はず、されどあさ

いする身のいさめ草と、さる人のいへるもげに、ことわりになん。やがて夕つかたになりぬれど、けふの花はしぼみたれども、又明日さかん花のつぼみの、ほのかに色見せたるいとゆかしうて、樂しみなるものなり。東都なる入谷といふ里にては、やなみに此花をうゑて、おのがじゝきはひあへりと、さてもいかにめでたかるらん、田舍なる賤が垣根にはふものすら、朝ごとに目もさむるばかりなるを。

朝な〳〵色あらためて咲くはなは
いかなる露のわけておくらん

地

出雲國飯石郡三刀屋村 奥原ふく子

堪へかたかりし夜半の暑さを拂はんと、疾く起きいてゝ、やり水に口そゝぎ、まなこあらひつゝ、垣根のあたりさまよへは、若葉をそよぐ朝風、肌にしみて、はら〳〵とこぼるゝ露のしら玉の、袖にかゝるも凉しく、今をさかりと咲きいてたる朝顏のうるはしさ、目もさむる心地して、夕をまたぬ花としいへと、あさな〳〵紐ときかへて、露おもけなる姿の、いうにやさしき、誰かはあはれとおもはさるへき。

あさな〳〵ひもときかへて朝顏の
露のすかたのなつかしきかな

人

鹿兒島縣阿多郡田布施村尾下九番戶 平田すま

あらかねの土もさくばかりのあつさもやゝうすらぎて、秋風やう〳〵すゞしうふきわたるあした、朝顏の垣根にはひゝろごり、紅に、あるは、紫に、あるは白に、さきみだれたるばかり、らうたきものはあらずかし、里の子らは、それとみて、まがきの竹などをぬぎとりて、枝ごとにこの花をさし、あるは糸にながく貫ぬきて遊び興ずるなど、めでたくもまたゆかし、つるべとられてもらひ水といひけんも、げに此花にて、枝のあたりうつくしうさきまとひたるときは、水くまんもあたらしうて、かくはよみいでたるならん、たゞあだし花とはことなりて、朝日まつ間のあさがほと、人はいふめれど、かゝりてころ、なか〳〵に見どころはありけれ。もし此花にしてさきながらへんには、いかでかく色香めでたかるへき、ほの〴〵とあけわたりたる朝毎に、きよらなる露をふくみて、すが〳〵しうさきかはることの、いといさぎよきかぎりになん、

逍遙　（五篇）

師岡千代子

「朝かほはあさなあさなに咲きかへて盛り久しき花にそありける」と、なにかしの　天皇のよませたまひけん朝かほの花ぞかり、めてたきはあらずかし、朝霧のむら〳〵と晴れ行く庭の面、籬の本なとに、花のいろ〳〵うすくこく、やう〳〵開けそむるさまのおもしろきに、置きそはりたる露のしら玉、ことくさに似さるは、實に此れの干ぬ間の命なれはなるべしと思ふに、いと〻めてたくなん、短夜の月を見て、あくるも知らさりし身のつかれは思はて、朝とく起きつ〻打見るが面白き、只心を慰むるのみにはあらざりけり、されど今は庭作りの家々は、數多き花の色々を、又更に、鳶色、樺色、其他またあらぬ色々の花を咲かしめて、あるは商なひ、あるはやごとなきあたりに奉れるさへありけり、芝公園の曙の霧をわけ、入谷あたりの朝の露を分けゆきて見つるはぞそ、かの源氏の物かたりのさふらひ竈のさまも、某中將のおもひなしもおもひいてられて、にるものなしや、そもこの花、いまは一向漏斗狀の花にて、五片三片なる葉なるをのみ朝顔とはいへれと、古くは桔梗をも木槿をもしか云へりとなん、又近頃ある人は「朝かほはあさ露おいて咲くと云へと、夕影にこそさきまさりけれ」の歌によりて、かの野菊といふものなるへしと云へり、いかゞあらん、そはとまれ、只夕影またぬとか、露の乾ぬ間とかいふことの、あかぬ心地のせらるれと、そはこの花の性質にて、盛のみしかきにあらず、秋の末つかた、異草のかれたる中に、猶さきのこれるか、中々に松の千年の榮ればゆるも、又この花めつるあまりの心なしこやあらんかし。

太田貞子

生ひ立た〻んはいつにかなど、ひまなう待ちわたりし心盡しを、心なき草もおもひ知りてにや、此の頃はとみにはひひろごりて、みぎりのあし垣、ひまなき迄になりぬるにぞ、うれしきものから、今は只花をのみ待ちいろがれて、起き憂かりきあしたの床の、さりけなうなうなりぬるもをかし、けふも夕立のあさ風、心地よきにもよはされて、あなたこなた外けめぐるほど、例のあし垣に、二花、三はな、見いでたる、うれしさの限りなりかし。あはれ、此の花や、日

影待つまの露の命を、はかなきよのためしに引き出でられつるもあめれど、倚何がしのひじりは、千とせの松に變らぬ操のほどをこそ、こよなくはいひ出でつれ、まして、あさまだきに匂ひては、いぎたなきよの人の戒しめと、なりぬるも又なしや、など、ひとりおもひつゞくるほどに、あしたの日影みる〳〵高うなりゆきて、花の白露ほろ〳〵とこぼれ行けど、これもおなじく打ちしぼみて、又一しきり吹くかぜに、名殘りなう散り果てぬ、

いたづらの榮ゐはまたぬ朝顔の
　　花こそ清き心なりけれ

眞鍋　直子

夏のあしたは、ことにこゝろもすが〳〵しくうれしきものなるに、まして此頃は、かきねの竹にはひまつはれる朝顔のもとに、ゆふべ〳〵あす咲きぬべき花の數をよみつゝ、水打そゝきなどなしてまちゐつる朝けに、いと目ざましう、さま〳〵に咲き出でたるに、露のおきわたしたる、涼しさいはん方なく、心地よくいぎたなき朝いの床も、おのづからとくおきいつるやうなりにたる、いとをかし。

今藤なか子

夏の夜のならひとて、ゆめも結びあへぬ間に、はやねぐらを出づるむら鳥、木の間にさへづる雀の聲に、あかぬ眠をさまされ、をしきふしどをたちいでゝ、顔洗はんと井戸邊にゆき、ふとかたへの垣根をうち見やれど、母なる人のなぐさみに植ゑ置き給ひし朝がほの、二ツ、三ツ、四ツゑみそめて、さしのぼる朝日にうつろへるゆかりの色の、一きはうつくしくつややかに、得もいはれぬ愛らしさに、あな美しやといひしまゝ、われを忘れてひたぶるに眺め入りぬ、姉君の顔洗ひのながきことよ、何をなし居給ふにかと、妹の呼ぶに驚きて、我にかへりぬ、さてもけさ咲きいでし初花を、母君には見せまつらで、われのみ一人まづながめし事のおぞましさよ、母君こそ先にめで給ふべきなるを、さても心なの我身やと、思ひつきては、なか〳〵にわがねざめのうさをなぐさめしあさがほに、面なき心地のするぞうたてき、いざとて母君に知らせまつりしに、されどこそ植ゑ置きしかひあれと、よろこび給ふぞ嬉しかりける。

朝がほはいのちはかなき一年生の植物ながら、あさ

な〳〵時をたかへず、世にも美しく咲きいでゝ、人々の起きいづる頃には、口を開きて「御早う」といはぬばかりの風情あり、日影のうつるに従ひ、やう〳〵に口を閉ち、初め、ひるちかくなれど、一朝の榮華を夢と觀て、ねむるが如し、されど世の人の、大かたは朝がほのあだなる色、はかなきいのちをのみながめり、われは或人のよみたりけん

あだなりと見てやはやまぬ朝顔の
　咲くも萎むも花の誠を

の心もてめづるになん。

降田まき子

草も木も同じ緑にしげりあふ頃、庭の垣ねに咲き出たる朝顔こそ、いともゆかしけれ、そも此花よ、たぐひいと多く、其色の美しく、其形の愛らしさ、げに似るものもなし、ちさき鉢などに植ゑたるが、四つ五つ咲きたる、またなくをかし、朝とく起き出でてながむれど、目もさむる心地ぞする、たゞ其花の盛りの短かくて、露のひるまをまたぬは、あかぬ心地すれど、なか〳〵にちることと知らで、色香もあするまで、殘りたるよりも、ゆかしく、ことに朝な〳〵咲きかへて、さけどもさけどもつきせぬこそ、他草にもまさりて、いともめでたけれ。

（以下原稿到着順）

佐々有隣子

朝な〳〵にさきかへてさかりひさしとうたひけん、故人の詞うべなりけりな。玉なす露はいろ〳〵の花にれきわたし、艶々しく東雲のけしきをそへぬ。門もる犬の起きわすれたる下部をいましめ、二聲三聲耳つらぬきなきたてゝ、かしましきに、朝がほの花のけたかく、にほひうるはしきは、世はなれしこゝちせられて、立ちもさられず、窓の小かめに一つるさしてながむるに、あかずして、

ひらきみる晝のはやしにあさがほの
　はなうるはしくにほひぬるかな

碓井武子

朝がほにつるべとられてとよまれけんも理りや、實にれもはぬ方にのみひろがりて、さきみだるゝ花よ、されど又かしこの園こゝの園にて、さま〴〵の形をつくらんとて、かよわきつるをひねくりまはしなどするは、いかに草花とはいへ、いた〳〵しうれば

ねて、いと心ぐるしけれど、かへりて花のまに〱さきみだるゝころゆかしかりけれ、さて又日にあへど、すぐにしほむ花にはあれど、めざましぐさとて、いまだ空のしらまぬうちより、露ときねをあらそひつゝ、色香ゆかしくさきいでゝ、人のをこたりをいましむるなど、いと〱めでたくやさしき花になん。

鎌田きくの子

朝まだきれきいでみれど、中垣に二つ三つ四つ葉かくれにかろふる計り、朝かほの朝日にむかひ、笑しげに吹きいでたる花の色いろにはひてめでたかりしが、はかなくも入るとゝもにしをれけり、あはれはかなき朝かほになん。

佐藤かめを子

ふみ月どかりいみじくあつけれど、夜のふすまさへいと苦しく、起きて見つねて見つまどろむうち、はや天の戸も押しあけがたになりぬらん、鳥のねどころはなれんとてや、鳴くなる聲も聞ゆなり、やがて吾れもふしどを起き出てゝ、顔など洗ひ、庭の面をろゞろ歩みながら、ふとあなたを眺むれど、柴の袖かきに、いとにほひやかなる朝顔の、花の今をさかりに咲き出でたるさま、物云はねども、何となうゆかしくて、思はずろどに進みより、花の姿を能く見れど、月にさやけき白露さへ結びて、花も色々にて赤、紫など濃く薄くまじりて咲き出でたるもいとをかし、まして此草のつるのたをやかにのびて、柴にはひかゝれるも、何となうやさしくて、又をかし、をりしも何處よりか、いと美しき蜜蜂の、はね打ちならして、二つ三つ飛び來りて、花に葉に遊びたはむれるるなど、いみじうをかし、ことに此草の葉にやう〱結ぶ朝露を、ほろ〱と蜜蜂のゆるぎ落すなど、いと口惜しうればね、あるは又蜜などくまんとて、花より花に飛びうつる姿の、いとみやびやかにて面白し、吾れも心を此の花にや奪はれけん、豊坂昇る朝日かげに、初て驚き退きて家に入りぬ。げに朝顔やあしたに咲きて朝にしぼむと云へども、花さへ實さへいとまめやかにとゝのひて、こと草にも劣らず、朝な〱の勉めにも、をこたることのなきものを、朝いね過ごし學びの童どもに見せまほしくなむ。

河野多加子

いつものごとく疾く起き出で、先づうがひ手水を終

へ、庭のくま〴〵そゞろあるきて、淸く新らしき氣にふれ、心地いと淸々し、あな早起は養生にもともよろしと、ききつるが、げにさもあらんなど考へつつ、かねて種々植ゑ置きつる草花の邊に近づけば、あさ顏の花三つ四つさき出でぬ、妾は花てふ花はめでぬはあらねど、あさがほのやさしくあどけなく、いやみのなき、なか〳〵に他花にましてめづる心深きに、日ごろ手を盡して培ひにしかひありて、例年のよりは、花の輪立ちまさりて、その色もいとこく、露重げなる風情、なか〳〵にふかし、あはれ世の女子たらんものは、此花のごとくやさしく立ちふるまふべきになん。

武重　たけ子

昨日今日いたく降り續きし雨もはれぬれど、塵さへあらぬ吾が庭に、もゆる草木は靑々と生ひ繁りて、げに夏の心地もせらるるかし、されど、今朝はいととく起きて、裏の襖を押し開けて、かなたこなたを見まはせど、何つの間にか朝顏はつるべの繩にからみ付き、赤きが中に白きを染め出して、いと面白く咲きぬるに、目もさむるばかりなり、又た水にうつりて、繩を傳へにさきまとへる花は、恰も面うるはしき少女の、みどり深き靑衣をまとひ、髮には又美しき花をかざして、已がすがたを眺めつゝ、朝鏡に向ひつる樣にて、又しのゝめより光のもれ來る頃になりぬれど、葉末に宿る白露は、銀の玉かと疑はるるばかりにて、花の飾の美しく輝く樣など、筆もて書き、又文に作るべくもあらざるなり、

されど、ひるもよう〳〵近くなりぬれば、玉を欺く花の面かげもしぼみ初むるぞ口をしき限りなる、暫し先きは花の盛をめでにしも、はや散りぬとは夢とばかり思はる、されど朝顏はいととく散ると識れども、決してさる事にあらざるなり、如何なる花も、盛り長ければあきぬるは人の情なり、未だ見あかざるに散るころ、げに貴ぶべき物にあれ、とく咲きとく散りて、朝なあさなに變りて、めづらしき花の咲くが故に、かくはあさがほのめでらるるならんかし。

水津　すけ子

雲と見え霞と疑はれつる花も、いまはみどりとかはりゆき、日光は黃金もとかさむばかりにてりかゞや

く頃はひ、朝まだき人のねきやらぬに、獨り朝露にぬれて、こき紫に、うす紅に、さま〲の色に咲き出でたる朝顔の花は、いとめでたくうつくしく、見ところあり。日ごろやれはてたる賤か籬も、にはかに錦をもつけたるかと、見る目を驚かしむ。されど、かく多くの花にれくれて、暑さもしらず顔にさきれつとはいへ、旭日の東の山の端にいでゝ、百千の鳥の木の間に囀つるをりは、はやこのみやひやかにうつくしきにはひは、朝のけしきにかはりて、みるかげもなきさまとなり、しぼみれちて、またかへりみる人もなし。これをれもへど、さま〲のことゞも心にうかびて、かの方丈記の一ふしもれもひあはせられ、いとゞあはれそもよほさるゝ。けにこの花のはかなきは、人のこの世にあるに似たり。朝顔にして旭日ながらましかぞ、いかでかくしぼみれつることわらむ。とこしへにさかりをたもつことを得るなるべし、人もこの世につとめはげむとはいへ、この旭日にもたとへつべきときのきたるを思へは、吾身のはかなきをもいといたく思ひやられてなむ。

満津澤　富子

ねのれ朝とく起きいて、妻戸押しやれは、前栽の朝がほ、或はくれなゐに、あるは白に、或はむらさきに、ねのがしゝ思ふまに〲はゝゑみて花さかぬ、我身の息をいさめがほに咲き揃ひ、今朝こそは賤か垣根も、一しほ見所ある様れもほゆれ、いて母上姉上もろともに見んものをと、朝の用事もしをへ、ひるつ方に至り見れど、いつしかはかなくちりうせて、世の憂き秋を知らすなめり、實にむかしの人の物せしも宜なれや、しかはあれとも、朝顔を人の命に比へなは、なとかはかなき事やある、却りて花をぞさころ見るらめ、と、心の駒をむちうち、學の道にいそしみぬ。

山口　みち子

名にし負ふ都の春のにしきぞとて、世にたゝへられし柳さくらのながめも、いつしかゆめとすぎゆきて、今は青ぞ茂る木々の木梢になくせみのこゑをきゝては、あつさもいやましぬるこゝちして、ひと村雨のすゝ風をのみまたれつゝ、あさなく柴垣の千ぐさがなかに、朝がほの露をふくみて咲けるさま、いとうるはしくゆかしとはみえつれど、またひとしはなる

は、山里のあはれにしまゝに、つくろはぬ賤がまがきにうちみだれ、いとはづかしげにあさがほのそむけて咲けるさまこそ、あはれにもいとゆかしく、ねも言はれぬながめにて、ことにつぼみてふものいともめでたきふでてふものに、いとよくにかよひて、をしへなきにはの花だにも、かくひらけゆく大代代に、日々進みゆく敎への道をまねびて、ひゝはの文字をかきつたびぬるよとめでつるに、それにもましてやさしきは、よひ〳〵ごとに置くつゆの、まだきやらぬあさまだきに、とくさきそめて、よの人々の怠りのあさのねさめをうながしぬるにやと、思ひては、わらはなどはなか〳〵にはづかしうて、わが朝顔は花よりもあかくなりぬ、いて〳〵あすよりはあさとく起きいでゝ、花にはこらむと、思ひぬるもいとをかしかりき。

北島　切子

七重八重咲き亂れたる口なし色なる山吹の花も、はや昨日と名殘なう消ゑうせて、年々に愛つる朝顔の花の、朝なあさな庭の眞垣に色様々にうつろふ頃とはなりぬ、夕に數へおきし朝顔の花の、今朝ことどとく咲き出しかと、いと見まほしく思へど、いつになく朝とく起き出で、草深くおく露に褄うるほして、庭の通ひ路たどりわけど、おく白露を重げに、白紅咲き亂れ、そよとの風に、さながら妾を打ちまねくが如く、いと美しく、茂る葉かくれに、また夜は明けすとや思ふらん、咲かんともせで、東明の空まちどほげなるも、いとをかしく、實に巳か身の果敢なきことも打ち忘れて眺むるに、しばしか程に、夜もほの〴〵と明け初め、日の光さへまばゆうなりぬるに、今は名殘なう咲き揃ひけれど、幼き弟等打ちつれて見ばやと思ひし程に、はやそろ〳〵と上枝の方より首うなだれてしほたるゝ様の、いと〳〵いぢらしきやう覺ゆるに、あゝ實に諸人の唯かりそめの夢の間を命とたのむ朝顔の花はかり、世にたのみなきものはあらさらむなど、そゞろに立ちも得去らで、朝まだきよりいとゞものおもひにしづみぬ。

北島　松子

こぞのみな月の頃、父君腦病に侵され給ひし折、親しき同僚の某君より、眞心こめて贈られしは、最麗はしき鉢植のあさがほなりき、父上始め妾等も、此

上なら嬉しう、能き賜物と樂しみ培ひしに、朝な〳〵露新なる色に匂ひて、皆々を悦ばしめ、殊に父上の少しはまぎるゝやうなり給ひしは、いと〳〵うれしき限になむ、されど、今年も、去年の花の香なつかしさの餘り、梅雨の頃種子まきせしに、若草のもゆると共に芽を出しければ、取分け柴垣のもとに植ゑ、ささ竹など結びめぐらし、はる〴〵愛て培ひたり、一日餘りに蒸しあつければ、夕風入れんと庭に出づれど、やり水のあたりの千草は露をれび、樹々の葉渡る涼風に袂を靡かしつゝ、めぐりてあさがほを見れば、つぼみ一つ二つばかりつき初めぬ、あなゆかし、幾日經なば咲き出づらむ、なか〳〵に待ち遠し、いよ〳〵あすは咲かんと思ばゆる夕、村雨ふり出でたり、心にくきわざや、朝顔の初花なれど、いとゞ心のれかるゝなり「村雨はいたくなふりそ朝顔のあすは咲きなむものと思へば」明る朝とく起き出づれは、村雨は名殘なう晴れ、あさがほのいともれはきう美事に咲きたる花の上に、露のれきあまる風情、ゐもいはれず、筆にもうつしあへずなむ、あはれあすもあさつても、妙なる色に咲き出で、我等を樂しましめよ、妾も未明に起きていそしまむ、されど此花匂ひこぼるゝ妙なる色も、只つかの間の眺めなれど、何なうあはれに、ゆかしさも亦一入なり、凡て世の事、何事にまれ、あかぬながめのしてこそ萬のものゝ花なりけれ。

廣瀨きく子

夕つかた朝顏のつぼみの見ゐそめたるいとうれしうて、あすさくべき花の數などかぞへつ、つとめて起きいでみれど、ゆひわたしたるませのかなたこなたに、白赤あるはゆかり色など、いづれ劣らずうるはしく笑みのまゆひらき、朝露をふくめるさま、げに筆にも言の葉にもたとへんやうなく、しばしなにごとをもうち忘れてながめ給しに、幼き妹の目さめしけはひきこゐければいざ見ね、なれがたのしみてまちにまちし花のさきしをといへど、姉上多くさきてか、いろはいかなるがといひつつ走りきたり、けふは日のてらずもがな、やがてしぼまんことのをしさよと、めづるもことわりとればゐて、あさがほにつるべとられてもらひ水とうたひけん、むかしの人の心さへれしはかられてなん。

田中りん子

槿花一時露のめぐみにひらき、夕影またぬ花なれど、いとはしうあはれ成りけり、あれはてしかきはに、うるはしう咲初むる朝顔を見るに、おのが心のまゝにもせず、いとみぐるしきやれ垣の折れたるまゝに、まつはりて咲ける、其すがた貞婦の心を見せたる物ならんと、たゞには見るべくもせざりき、葉のゆる〳〵の色や、くれなゐのこきも薄きも、世の中の情はれなじ露のやどり、やしなひへては花の種、地より生して妙なる色をあらはしにけり、あはれゆかしの花や。

鈴木昌子

世に愛しまるゝものは、果敢なき程こそ其愛しみも一入ますものなれ　花は何れも果敢なきものながら、朝顔の花こそ又あはれなれ、日影さゝぬ間の露の命、されど朝な〳〵に咲きかへて、色さま〴〵なるもなつかし、しのゝめの東風しづかに吹き渡りて、身も浮くばかり涼しき頃、薄くらき、まかきの邊りに、四ッ五ッ咲きたる姿、あはれにやさしと愛づるまも、はや凋み初むるぞ惜しき極みなる、咲き分け、かすり、牡丹咲きなどの、赤や紫の、とり〳〵にきそひて咲き出てたるは、またなく麗はし、中にも八重咲とか云ひて、花辨二つ重りて咲けるは、いと見事なり、こぼるゝばかりの朝露にうるほひて、さらでも涼しき夏の朝は、尚ほ目さむる心地ぞする、かく麗はしき花ながら、露のひぬ間のながめなれど、世人は、はかなきものとしつれど、凡そ生きとし生けるもの、誰れか天數を免れん、人生五十長きに似たれども、天地の窮りなきには比ぶへくもあらず、されどころ朝顔の花も、色香美しく咲きて人にも愛で惜まるゝなれ、あはれ人の命も長きに似て、朝顔の花に同じきを思はゞ、短き中にも朽ちぬ功績をたてゝ、色香を千代に殘さんことを勉むべかりけり。

田津木久子

土さへさくとかいふなる、たへかたきあつさも、やう〳〵さめ行くあかつきのこゝちよさに、心なくも操返しては、母なる人に、とくれきすや、はや朝顔は咲きたるを、とくれきてみすや、かの花の、人の見ぬまにけはひして咲き出でたる、けふ咲きては、明日ふたゝひとは日本はさる花の正しき操にして、かの竹なとによりろひて、ひとりは咲かぬなど、女の

鑑ともたとへていましめられし人のありしか、けにけにさなり、なれもこの花にならひねかしなと、いさめ玉へるに、いと〳〵はつかはしう、いかてと思ひなから、いつもいつも此の花におくるゝそいとくちをしきや。

田代艶子

いつしかとまちし籬の朝顔も、早や此頃は時知りかほに笑みそめつ、白妙の雪なす色、茜さす紫の色、その他紅とりませて、朝露おびしさま、實に何もいはれずてなん、そも此花は、古より、文にも歌にも、はかなき例しにのみ云ひもてまつれど、さにあらずぞかし、實にや夏のなかばより咲きそめて、秋の末つかたまで、咲きの盛りの久しきは、いかでこと花の及ぶべき、されば　後水尾の帝の

朝顔は朝な〳〵にさきかへて
　盛り久しき花にぞありける

となん御製ありつる、うべなりや、そは兎まれ、めではやさるゝ七草のそが中にても、わきて朝顔こそいとめでたけれ、其麗しくて人の目をよろこばしむる、今更に言葉を待たずなん、あるはまかきに、あるは鉢に、うゑおきつる時は、日毎〳〵に朝とく起きてめづるより、おのずと早起のならはしとはなり、かつうめるおり〳〵の心慰めの料ともなるぞかし、また其葉よりは、酸素てふ人の藥を噴くと聞きつれば、また衛生にもなりぬべし、されば世の孃たちよ、學びのまどのすきだにもおはしなば、日頃いそしみ給ふ心やりに、一は身の衛生に、いかでうゑさせ給へや、妾此花をめづるあまり、拙き筆をもかへり見ずして、かくはものしつ。

北村孝子

あさがほは朝な〳〵にさきかへて、さかり久しき花にこそありけれ、その種類は大凡二百餘種もありて、やなみにうすくこく、さま〳〵のいろにさきにほへるは、目もさむるはかりになむ、されどはや、日たくれば、なかばはしをれそめたるは、ひと村雨のともいはまほしくて、あかずくちをしと、只妾は朝さくものとのみ思ひしに、當世は人々の工夫を得て、夜中にさかすもありとて、銀燭光りまばゆきわたり、露をおべる花のいろの、いと見榮あるものさへあるにいたれり、されば今の朝がほは、たゞ朝な〳〵にさ

くのみならで、夜にもまた咲き、さては大輪にも名花ありて、げに〳〵、朝がほは、世に愛すべき花にこそありけれ。

鷹野静子

常はいきたなき身すら、朝顔の花さく頃は、なんとなく目のさめ安き者にぞ有ける、されど空蟬の世にはかなきためしとせられ日かげ待つ間の命ぞといはるゝはいとゞ哀なり、花も花なれ人も人なれど、何事も心に任せずをしむ心のたへせねど、やをらふし戸を起き出で、昨日見しつぼみも咲きぬらんと、とく其塲に行き見れど、早きはすでに開き、おそきも今咲かんとす、赤きあり、紅に白きへりとりたる、白きに紫の飛入たるなど、おもしろく、よべの雨の名殘を見せつゝ露重げに咲き出でゝ、色々にさし出づる朝日の影にかゞやくは、さながら五色の玉をこきちらしたる如く、作れるいやしき我身とはかはりて、自らなる姿をめづるけ高き志、なかめ來りて思ひくらぶれど、味ひことにふかくこそ、

阿田いし子

ひとせのうちにも、秋は殊さら、千草の花の、いづれおとらぬ色香に咲き出づるなかにも、あけ渡る雲とゝもに、日々にあたらしく咲きかはる朝がほは、赤に白に、さま〴〵と、ふりもかはり、朝風のすゞしきに、露をおひたるさまは、日の中のあつさ有りともしらぬこゝちして、人の心もいはんかたなうすが〳〵しうて、あしたはいかなるうつくしき花ひらくか、日出つるまへにおき出でゝみんと、日毎にたのしくめづるものは、朝がはにこそあれ。

牧野貞子

朝かほの花ばかり、をかしくも哀なるはあらじ、いかなる露のおけば、おくもうるはしき花は咲くらん、はたはかなくしをれゆくらん、げに日影まつまの露の命よ、されと朝毎にたえず咲きかへて、色形さまざまなるぞ、すてかたき心地する、まだ白みもやらぬ東雲の頃、いみじう置き渡したるしらつゆを、おのか物にして、そこはかと咲きそめたる、白きのみが、二つ三つほの見ゆるもをかし、やゝ明けそむれば、赤紫、さては葉かくれなりしも、やう〳〵見えそめて、とり〳〵目さむる心地しつゝ、こぼるゝ計りつゆにうるはひたる、さらでも涼しき夏のあさげ、み

もうかんどかりなり、あるは鉢にうゑられ、あるは前栽にもてはやさるゝもうべにて、半は破れたるまがき、またはつくろはぬ賤が家などに、おのづから生ひまつはりたる、をかしともをかし、さるを、はかなきみをは覺束なき垣根にまかせて、露の干ぬまをあらそふ樣、大方のうつろひ易き世と、合せかこたるゝそあはれなる、さて世人の朝かほはさかりみじかく淺ましき物といへりしも、うべながら、さにはあらざるべし、花こそ朝にひらき、夕もまたでしば皇ひめれど、朝ごとたえず一つゞゝ咲きかはりて、なかく\さかり久しき物なりけり、されど　後水尾天皇のよませ玉ひし如く、「朝かほは朝な\に咲きかへてさかり久しき花にぞありける」などもおぼされて、朝かほの名負へしもことわりにて、かの槿花一朝榮といへるはこの心なるべしや、そはともあれ、この花よ、見る人の心々によりて、淺ましくも、めでたくも、いひ出でらるゝ事のをかしう、かつは釣瓶とられてと、打ち興じけん昔のみやびめのしのばるゝもあはれ。

柚木　理子

夏の朝、あさがほのまじめにさけるもをかし、白きも赤きも、うすきこきとり交せて、籬垣にはひかゝれるさま、五色のふきながしを打ちかけたらむごとく、うるはしともうるはし、されどこもしばらくの間にてと、惜める人だちおはかめれど、徒にながく、おのが容貌をかざるは、この花のこゝろにあらず、まいて無常迅速てふことの葉は、この世のならひといへど、獨りこをのみをしむべきかは、稱へつべきことにもあらぬを、いつまでつゞけりとも世に多しといへど、花の心はそをいさめがはなるやもしらずところ。

伊坪　ふさ子

露霜の秋となれど、荻、萩、薄、尾花、女郎花、かるかやなんど、咲きみだるゝ花多かるなかに、おのがもとも好めるは、朝顔になむありける、そはその姿の清げなるをいつくしみ、そのさかりの短きををしむのみならず、なほ一ッのゆゑあればなりけり、寐の眼の明方、空もやう\白みわたり、露重げなる樣のあはれなるは更なり、おぼつかな、たれとかしらむ秋ぎりの絶間に、二ッ三ッ見えたる、巧の繪師もうつしうまじき心ちぞする、おきて見んと思ひし

ほどにかれにけり、露よりはかなきは、まことに口惜しき事にはあれど、あすはこの蕾も咲かむ、かれも開かむ、いかなる色か多からむ。しぼまぬうちに見ましなど、例よりとく起きいらるゝは、この花のためにこそ、

しのゝめのひかりあらそふ朝顔の
花は吾身のしをりなりけり

松風村雨のうた　小町谷里江子

うるはしき花のすがたの乙女らも
須磨の浦わに身をくだきつゝ

鹽井ふく子刀自に贈りまゐらす　住山幾子

色も香もゝとゝゆかしく思はれて
露もみだれぬとこなつのはな

夏月　樹下安子

かも川の水にやどりてみつよりも
すゞしきものはなつの夜の月

露　安井童子

しむらくは玉かとまがふしら露も
風をかぎりのいのちなりけり

水郷霧　安井龜子

ひと本の松のたちどもたどるまで
夕ぎりふかししがのからさき

螢似露　畠山千代子

風わたる草の葉すゑにおくつゆの
ちりのこれるは螢なりけり

湖上螢　牧野貞子

さゝなみやしがの浦わの夕かぜに
湖とは〳〵はたるとふなり

豐後國國久住山の奥なる草廬にて　長田年子

里人にみせまほしくもおもふかな
さきみだれたる花のさかりを

初めて女鑑を讀みて　北島きよ子

妾が病の床につきしより、心も勇ます、ふさぎ勝にて、つね〳〵好める讀み書も、醫師より止められけるが、妾の身には、食ひ物を絶たれたらんやう思はれ、いと淋しく暮し居りしに、此頃親しき友の見舞

ひ來て、四方山の話より、國光社にて女鑑といふ雜誌を發行するよしを告げられけれど、いと見まほしう思ひ、父君にかたりしに、幸ひうなづき給ひ、やがて書肆に取寄せ方を賴みし後、指をり數へて待ちわびゐたるに、間もなく第百十號のつきける、其時妾の嬉しさ譬ふるにものなく、さながら龍の美しき玉を得たらんやうの心地して、ふさぎ勝の病も、いと勇ましうなりて繙きしに、論說、家政、學園、文林、敎の庭などの、かず／＼の欄をまうけられ、一ッとして女のかゞみとならざるはなく、げに女鑑の名むなしからず、さて世には婦女子の雜誌、くさ／＼あれど、徒らに三號雜誌とやらのそしりを受け、世の女子をして、怨を殘さしむるもの多きそがなかに、女鑑は號を重ぬること百十號となりぬ、これ偏に記者各／＼方の、日頃女德の衰へたるを矯めんとのまごゝろより出でしならんと、推しはかられて、いと高き惠みに感じ、ちまたにひろむ、無學の妾も、共に女德すぐれし世の姫たちと、敎の庭に遊び、拙なき心を磨かまほしう思ふ心の抑へがたく、いさゝか一筆をそめ、女鑑の日に月に榮ゑまさんをことぶき、且つ國光社員のあつきめぐみを謝し、かた／＼本誌を讀まるゝ世のはらからへ、初對面の挨拶までにかくはものしぬ、文の林、敎の庭にたち學ぶ末賴もしき姫たよち、幸ひに妾が不學をな捨て給ひそ、

ほたる　　松野みさを子

蚊やりいぶせき門のはひりに、きゝなれしうなゐのこゑたかく、そこよこゝよと立ち走りのゝしれど、小窓のあしずかゝげてみやるに、一つ二つとびかふはたるは、柿のはしげる木下やみに、光りもことに明くて、いとおもしろし、こは近隣のをとめがとりゐてしも、袂をもれたるを、その友たちの、はゝきふりかたげ、うちはあふぎて、をちこちと追ひまはせども、羅にもりて、文みんとにもあらず、世心つかぬとちのすさみのはかなさは、いとあはれふかきものにこそ、

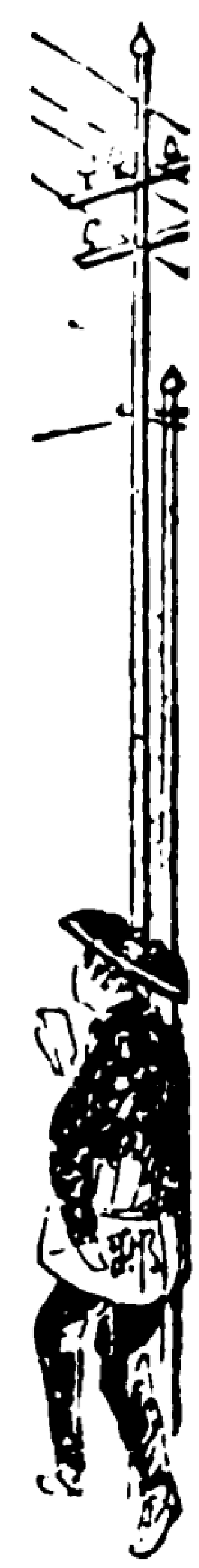
をさな子がまねく扇の追風に
　いよ／＼高くとぶほたるかな

故鄕の夢　　鎌田きくの子

過ぎ行く月日矢の如しと云ひし言の葉こそ、道理なれ、妾、都へ登りし時、四方の山邊の櫻花今咲く計

り色めきしも、はかなく雪とちりはてゝ、牡丹や、躑躅、藤の花、いつしかすきて、庭面の木々、青葉に茂りきて、月の影さへもれすなりぬ、夏もなかごとなりゆきて、二月三月とすきぬれど、いとしのはる故郷の我がたらちねやはらからやは、今やいかにかれはすらん、朝な夕なに忘れかね、いざとひ書をまゐらせんと、筆とりて書きいでしをりからに、かすかにきこゆる鐘の音、ねよとの事とまどろめは、夢か現かまぼろしか母の姿はあり〳〵と、見えてうれしさ限りなく、あらなつかしや母上と、すがるたもとに、明けからす鳴く一聲におどろかされ、しのゝめ空ともろともにあはれ姿はきえ失せて、かなしさ言はんかたもなく涙に袖をしぼりける、

一聲の言の葉たにもかはさすに
　あはれ姿はきえうせにけり



兼題

七月廿日
- 歌……瀧
- 文……苦熱の詞

八月五日
- 歌……氷
- 文……避暑



生田目經德編

標註 雅文消息集 全

（六月二十日發賣）

菊版美本
全一冊
定價金廿五錢
郵税四錢

日用消息文の撰範は中古文にとらざれば雅馴なる言詞艶麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもろの躰大にとゝのひ雅馴にして艶麗なる好撰範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學ひ日用の消息に適用するはまことに必要のことなりこの篇專心を用ゐて古人の消息中より高尚にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側にれきて揩範となさば益を得ること必大なるべし。

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
（電話番號一九四六）

發行所 國光社

國光叢誌

七月五日
第一號發行
定價一部金八錢
郵稅不要

本社は、從來「國光」を刊行し、忠愛の主旨に基き、政治、法律、經濟等に關する所論を公にせるも、其の範圍、該博にして、政論諸説と相混じ、專ら、教育に關する意義を貫徹するに難きが如き憂あり。況や、世運の變遷は、特に本誌を發刊し、大に微衷を吐露して、**教育家諸賢**の劉覧を請ふ所なかるべからざるの時機に遭際せり。本誌は吾人が專ら

教育に關する本來の主旨とする所を陳へ、併せて、**同志諸大家の卓説**を**蒐集**し、又、別に、**交詢**の欄を設けて普く**江湖教育家**の**寄書**を掲け**質義應答**等をも載せて聊か**教育界**の**木鐸**たらむことを期す

●**教育家諸君に謹告**……前陳の趣旨により本誌發行候間何卒材料となるべき尊稿並に教育に關する實況報告等續々御寄投被成下候は、本誌の光榮不過之邦家教育上の裨益も不尠と存候に付何分宜敷御願申上候也

發行所
（電話番號一九四六）
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
國光社

女鑑第百拾一號目錄

〔明治二十四年八月八日內務省許可〕

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價	
一冊	十錢
六冊（三ヶ月分）	五十五錢
十二冊（半年分）	壹圓
全國無遞送料	

廣告料
五號活字廿三字詰一行金二十錢

明治二十九年七月四日印刷
同　年七月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所（電話番號一九四六）國光社

〔印刷所　東京國光社印刷部〕